月刊 オパーリン王国

２０１２年 ２月号

オパーリン

序文

２０１２年２月号、無事刊行である。まあ、編集執筆が間に合わず、いつもの発行日である２０日からは数日遅れてしまったが、月内に刊行できたので良しとしよう。今後もそこら辺はフレキシブルにやっていこうと思う。

さて、月オパも今号で５冊目となる。執筆者も増えやっと軌道に乗ってきたという感じである。連続性が生まれてきたというのは喜ばしきことであるが、これが惰性に変わっていってはいけない。そう自戒しつつ、今後も頑張っていきたい。

ということで、今月号は新コーナーを林立させてみた。一つは「ルポ」。エッセイとはまた違った、実施・取材報告的な記事を載せるコーナーである。もう一つは「論評」。これもエッセイとの差別化を図ったコーナーで、ちょっとお堅めの記事を載せていこうと思う。

また、コーナーの掲載順序もいじってみた。「オパーリン１ヶ月（日記より）」を後ろの方にまわした。これは東町氏の「日記は最後でいいだろ」という指摘によるもので、僕も「確かに」と思ったので聞き入れることにした。重要、読ませたいものほど前の方に、ということである。まあ、そんな事を言ったら僕は連載を読んでもらいたいんだけど、連載が最初に載っている雑誌なんてないしね。そこは悪しからず。

さて、今月号のラインナップをさらっと紹介する。今月号もまた新しい執筆者が加わった。その名も鶴首氏。フェイスブックでの発言が面白かったのでスカウトした。執筆依頼を快諾して下さり、「八百万の悪魔」という題で力作を執筆してくれた。内容は宗教観とかそういうものだと思う。

東町健太氏は記事を２本執筆してくれた。前回パソコンのトラブルでお蔵入りになった記事も（パソコンが復活し）送ってくれたという訳だ。毒が冴えわたっている。

弦楽器イルカ氏との合同連載企画「お前、悩んでんだろ？」第二回、今回の被害者はあの女装デブである。また、イルカ氏が１月号の多良鼓氏の記事に感想を書いてくれたので、特別掲載とした。

多良鼓氏は今回も博学っぷりを見せつけてくれた。ＩＤって何だか分かる？僕は知らなかった。面白くて為になる記事をありがとう。

僕の記事は、まあ当然読んでくれるだろうから特に書くことはしない。

では、月刊オパーリン王国２０１２年２月号、とくとご堪能あれ。

２０１２年2月２３日

「コカコーラのビン、キッコーマンの醤油差し、そしてスーパーマリオブラザーズ。」　多良鼓

標題に挙げた三つのモノ、誰もが一度は見たことがある代物だろう。実はこれら、いや、これらを含む多くの実用品は、ある一つの思想から形作られたものなのだ。思想と言うとなにか物々しい感じがするので、こういう風に言いかえよう。すなわち「機能的で美しい形」という考えに基づいて作られたモノなのである。自分たちの身の回りにあり、かつ使っているモノの「形」というものは、全てこの考えに沿ってデザイナーが頭を捻り発想している。この考えはインダストリアルデザイン（ID）と呼ばれ、今やモノを作るときには欠かせない考えとなっている。IDは、考えとしては世界中で昔から存在したものであるが、それが注目され活用されるようになったのはイギリスの産業革命に端を発する。日本では戦後まもなくして取り入れられるようになった比較的新しい考えである。アメリカのIDにおけるパイオニア、レイモンド・ローウィが書いた著作の題名は、IDの特徴をよく示している。すなわち『口紅から機関車まで』だ。

さて、このIDにおいて、商品は「機能的で美しい形」でなければならない。一目見ただけでそれが何なのか分かる程の個性と、使っている時にそれを意識させない程の使いやすさ・親切さ、これらがIDでは最重要の点だ。標題に挙げた三つのIDを象徴する（と私が勝手に思っている）モノ達は、もちろんこれらを備えている。百聞は一見に如かず！IDは見て使われてこそ！という意見はもっともだが、ここはあえて野暮ったく一つ一つを例にとってIDを言葉で説明してみよう。

まずはコカコーラのビン、正式名称コンツァーボトルについて説明する。このボトルが使われるようになったのは１９１５年からなので、今年で９７歳の超長寿デザインだ。前述したIDのパイオニア、レイモンド･ローウィをして「完璧なデザインだ」と言わしめた程のモノである。１９６０年にはアメリカの連邦特許庁が稀有な例として、ボトルとして初の商標登録を許可していることからも、その特異性は垣間見ることができる。それまでに無かった曲線ある美しいデザイン、どんな手にもピタリとフィットする機能性、まさに見た目と実用性の両面において素晴らしいデザインである。このボトルを作る際に「暗闇でも触った瞬間分かる」というものと、もう一つ「割れたとしても一目でコカコーラのボトルの破片だと分かる」という注文があったらしい。コカコーラの個性は、IDを用いて意識的に形作られたものであったのだ。この個性あるボトルは、ペットボトルへと変遷しても変わらず用いられており、コカコーラとは何ぞやという人々の意識に対して一つの答えを担っている。

お次はキッコーマンの醤油差しだ。醤油差しはキッコーマンがオリジナルを作る前からあったものだが、キッコーマンの醤油差しが出るまでは何とも古色蒼然としていて、デザイン的にあまり質のいいものではなかった。それに、何と言ってもそれまでの醤油差しは、注ぎ口の部分に醤油がこびりついてしまい、醤油を出した後の口からは醤油がポタポタツーッと出てしまう、みっともない感じになるのが普通であった。キッコーマンは、一般家庭だけでなく飲食店などにも使える、機能的で、シンプルで、美しい、オリジナルの醤油差しを作ることで、自分達の醤油のシェアを確立しようと試みた。結果、創作されたのが、あのキッコーマンの醤油差しである。下に行くほど半径が広くなる安産型の形状。なだらかな曲線で首の部分が一番細くなるようになっており、女性子供でも掴みやすいようになっている。注ぎ口は左右両方についており、色は赤。入っている醤油の黒色が見えるようにガラスで作られたビンの真ん中に、黒を引き立てる金文字。シンプルながらも親しみやすく、かつそれまでの醤油差しとは一線を画しているデザインである。しかし、なんといってもこのデザインで素晴らしいところは、醤油の注ぎ口だ。このビンの注ぎ口をよぉーく見てほしい。注ぎ口の上の部分が若干突き出ているのだ。それまでの醤油差しの欠点として醤油が垂れるという点があったことを先ほど述べたが、この上が付き出る形状によって、醤油が垂れることを克服したのだ。たったこれだけで、醤油を出した後の注ぎ口から醤油が残らず、ビンに戻っていくようになったのである。このビンのデザインは世に受け入れられ、大ヒットした。たった一本のビンで、日本の醤油事情は様変わりしたのであった。

最後に、スーパーマリオブラザーズ（SMB）について述べる（そしてここが最も書きたかった所である）。普段ゲームをしない人でも知っている、日本のビデオゲーム史におけるレジェンドとなった、あのSMBである。「え？ソフトの形はみんな一緒じゃん」とお思いの方、SMBでIDが使われているのはソフトでもパッケージでもない。SMBの中身が、まさにIDに沿って考えられ、構成されているのである。SMBはファミコンにおいても初期のゲーム（初めではない）で、しかもゲームジャンルとしては当時珍しい「横スクロールアクション」であった。それに加え任天堂は、このゲームを遊んでもらう対象としてゲームをやったことのない一般家庭の人をも視野に入れて開発を行っていたそうだ。つまり、ゲームをやったことも無い人にとって、ゲーム・横スクロールというものの概念、そして遊び方を「ゲーム内で」教えなけれ

ばならなかったのだ。もちろん、チュートリアル（ゲームの遊び方を教えるためのゲーム内での説明）は無い。説明書はあるが、説明書を見ない人もいる。そんな人たちでも楽しく遊べるには、という考えの下で当時のスタッフは大いに頭を悩ませた。それによって生み出されたSMBのシステムは、何処を切ってもなるほどと思わせるような構造になっている。ここで全てを挙げるときりが無いので、１面の構造に焦点を当てて今回は語ってみたい。SMBの１面、やったことのある人は思い出しながら、無い人は動画サイトなどで構造を見ながら是非読んでほしいと思う。ここでは、解り易いように、初めてゲームを触った人風で書いてみたい。

スタートボタン ポチッ
　背景に山が書かれている平面上の地面に、髭のおっさんが立っている。十字キーの右左を押すと、おっさんが歩く。上は動かない。下は何だ？しゃがんでいるのか？Ａを押すとジャンプか。Ｂは・・・何も起きないぞ。
『とにかくこのゲームはおっさんを動かすゲームらしい』
　この時、おっさんが立っているのは真ん中よりも左寄り、そして向いている方向は右だ。じゃあ右に進むのか。なるほど。
　ゲームを始めた人は、何は無くとも、とりあえずおっさんを右に歩かせてゴールまで連れていく事が目的だと何となくここで理解する。敵は始め出てこない。右に動かしていくと画面が右にスクロールしていき、キノコ（クリボー）が出てくる。敵である。当たるとミスになるが、事前知識が無い状態ではこれが何なのかも解らない。つまり、特攻。
ピロロッ　チャランチャチャッチャッチャッチャッ　ドゥンドゥドゥン
『・・・』
　スタート画面（「World 1-1」と書いてあるあの画面）になり、初めの場所に戻されるおっさん。
『当たっちゃ駄目なのか、あのキノコ』
　ここでゲームをしていた人は、既に「おっさんを歩かせて右に行く」「キノコ（クリボー）に当たってはいけない」という事を理解した。では、当たらないようにジャンプしていこう。
ピヨーン　ピヨーン　ピヨーン　ポコッ
『！？』
　キノコを避けようとしてジャンプをしていたら、踏んづけてしまった。しかも、潰れて消えた。ここで敵を倒す方法も伝える事が出来た。ここで伝えられずとも、実はクリボーを避けようとして踏むように出来ているポイントはここだけでなく、１面のあらゆるところに作られてある。そして、クリボーより少し早めに画面に表れてきた謎の？の箱。
『何だあの箱』
　？ボックスは、背景へ溶け込まないように点滅し、かつ背景よりも速く動くことで遠近感を出しおっさん側のものであることが強調されている。
ピヨーン　ガッ　コイーン
『なんか出た！』
　しかし、何も起こらず。少なくとも害はないようだ。？の箱に頭突きをすると、何か出てくる事が解った。
　さて、ここまででゲームをした人は既に「おっさんを歩かせて右に行く」「キノコ（クリボー）に当たってはいけない」「キノコ（クリボー）は踏んづけると倒せる」「？の箱は下から頭突きすると何か出てくる」という事を理解している。いずれも、SMBを遊ぶために必要な最低限の知識だ。そして現れる、連なる５個のブロック（ブロック・？・ブロック・？・ブロックの順）と、土管。
『？の箱だ。頭突きしよう』
ピヨーン　ガッ　ビヨヨヨヨヨ
『うわっ、キノコだ』
この時点で解っている事は、キノコに当たると死ぬ、それだけである。なんとかしてキノコを避けたい！幸いにもブロックの上に出てきたキノコは、そのまま下にも落ちてくる事無くブロックをつたって右にスーッと動いていく。
『ほっ・・・』
そしてキノコはブロックの右端から落ちる。土管にぶつかって方向転換し、こちらに向かってくるキノコ。
『！！！』
ヤバい！避けなくては！それか倒さなくては！どちらにしろジャンプするしかない！

ピヨーン　ガイン
連なった５個のブロックに邪魔されて、高くジャンプができない。
『うわっ』
迫ってくるキノコ。飛んでかわせそうにもない。左に逃げる！が、スクロールした画面は戻る事が出来ない。もうおしまいだ！キノコが当たる！
ピロロピロロピロロ
『・・・！？』
なんだ、おっさんがデカくなったぞ。何が何だかわからないが、とりあえず死んではいないらしい。それどころか、２倍くらいのでかさになったような。
ピヨーン　ボワ　パラパラパラ
さっきまで邪魔していたブロックが頭突きで壊せるようになっている。明らかに先ほどのおっさんに比べてパワーアップしているのだ。かくして、ゲームをやった人はキノコには種類があって、ぶちのキノコ（スーパーキノコ）は取ると強くなる事を知ることができた。あのようなブロックが連なった形状になっているのは、無理やりにでもスーパーキノコにマリオを当てさせ、「これは良いキノコだ」ということを教えるための構造になっていたのだ。

　さて、ここまででゲームをやった人は、ゲームの目的、マリオの動かし方、敵とアイテムの見分け方、敵の倒し方、等といったおおよそこのゲームを遊ぶために必要な知識を身につける事が出来た。時間にすれば、何とここまでの事を教えさせる為に２分もいらない。ゲームの１面の本当に最初の最初の最初に位置する1場面だけで、これだけの情報を遊んでいる人に伝えてしまったのだ。それは、文字や言葉による文章情報ではない。ゲームそのもののデザインだけで、ここまでの情報が詰め込まれているのだ。SMBはIDにおける美しさ、ゲームにおいては楽しさに比類するデザインをしっかりと持ちながら、しかもIDにおける機能性、つまりゲームにおける解り易さ・遊び易さを両立させている。そのデザインとは、「初めての人でも楽しく遊べるデザイン」という観点でID的目的論から導き出された、一つの完成形であると私は思っている。
　IDとは今や社会に必須の考えである。機能的なデザインは突き詰めていけば芸術のようでもあり、職人技のようでもある。しかし、使われる場面は本当に身近で、ぱっと周りを見渡しただけでも其処彼処に存在する。そこには、特化した機能とデザイナーの思いが詰まっている。そんなことに思いを馳せれば、モノに対して新たな見方ができ、面白い発見がまたあるかもしれない。今、これを読んでくれている読者の方々。そのパソコンは、スマフォは、紙は、どのような形ですか？

「寒天撲滅の日」　東町健太

この記事を書いているのは２月１６日である。この日は何の日かご存知の方はいるだろうか？この日はなんと！「寒天の日」なのである。だから普段は、「寒天の話はしたくないです。そのことについてはお願いだから触れないでいてください。もう私たちを放っておいて！」と泣く寒天にトラウマがある方も、「寒天？うるせえよぶっ殺す。さわんじゃねええっ」と怒るアンチ寒天派の人も、どんな人であってもこの日ばかりは寒天を貪り食わなければならないのである。いったいどこの誰が、いったいどんな権威をもって、いったい誰の許しを得て２月１６日を寒天の日などという愚かで何の意味もない日に定めたかは知らないし、もはや知りたくもない。しかし今日は寒天を貪らなけれはならないのだ。のだのだのだのだ。野田死ねっ！とても残念なことだ。悲しいことだ。

だから私は今日、必死になって寒天を貪った。豚のように。ぶうぶう。山のように皿に盛られた寒天を前に歯を食いしばり、嗚咽号泣しつつ、人の世の不条理を嘆きつつ、「うふふ。むこうでアヒルさんが警察官をばんばん撲殺しているよ。うふふ。」などとにたにたしながらつぶやく半ばアレな人になりつつ貪りましたよ。まるで豚のようにねっ！

が、ふと気づいた。今日は寒天の日と定められているにもかかわらず、僕の周りの愛すべきヒューマンたちは誰ひとり寒天を豚のように貪っていないのである。愛すべきヒューマンのみんなっ！一体どうしちゃったっていうんだい？！私は訝りながらも彼らを観察してみた。するとなんたることか、愛すべきヒューマンの馬鹿どもは寒天を貪るどころか、ポテトチップス、ほっけの煮付け、スパゲッチーナポリタンなどを放歌高吟、呵呵大笑しながら楽しげにハッピーに召し上がっていらっしゃいやがるのである。寒天などふみにじりながら。ながら。ナイアガラの滝って一回行ってみたいんだよね。私は混乱パニックした。何故あの愛すべきヒューマンの馬鹿連中は寒天を貪らないのか。虫なのか、やつらは虫なのか？そう思って私は彼らに聞いてみた。「何ゆえお前らは寒天を貪らないのですか？虫なんですか？」しかし彼らは虫ではないと言う。むしろ寒天を泣きながらにちゃにちゃ食っている私のことをみなでディスって笑っていた、と答えたのである。悲しかった。世をはかなんじゃった。今日は寒天の日だというのに誰一人として寒天を貪らない。こんなことがまかりとおっていいのだろうか？この世に正義はないのであろうか？私は今すぐ消えてなくなりたい。タイヤキ食べたい。

そこで私は悟った。悟ったよ～でへへへへ。寒天の日もふくめて「～～の日」というものはみんなごみだ。無意味だ。ナンセンスだ。だってみんなそんなの無視してんじゃん。こんなことを書くと「いやキリスト教徒とかガチでクリスマスとかやってるよ。お前馬鹿じゃないの？今すぐニトログリセリンで粉々に爆死したらいいよ」と言われるかもしれないね。でもあいつらだって内心本当にガチかどうかなんてわかったもんじゃないし、まあ物には例外ってのがあるじゃないっすかあ～勘弁してくださいよ～って思ってるよっ！はは論破。２ちゃんねるとかで論破って単語使うやつはみんな馬鹿だよ。俺も馬鹿だよイエイ！！

ここで「～～の日」に関してひとつ思い出話をしよう。「～～の日」っていうか「～～週間」の話なんだけどね。まあカテゴリーは一緒だからいいかなあって思ったんです。ついデキゴコロだったんです。それは私が小学生のころの話だ。「君たちには無限の可能性があるんだよ」とか教師だかだれだかに言われて目をキラキラさせていた小学生の頃の話だ。あのころの自分に今現在の一片の可能性すらもたずに最底辺人生を歩む俺の姿を見せてやりたいぜ。先には絶望だけしかないぜ。みんな俺のことを毛虫のように嫌っているぜ。実際俺はメシ食って寝て死ぬだけの、毛虫とおんなじような存在だぜ。見たら泣くだろうなあ。人生の幕すごい勢いで引くだろうなあ。それが幸せだったかもしれないけどなあ。私の通っていた小学校では、確か９月のおわりごろだったと思うんだけど、近隣のおまわりさんを招聘して交通安全について子供たちに指導してもらう、という時間をとっていた。９月の終わりには「交通安全週間」があるからである。鉄は熱いうちに打て、という言葉がある。子供のころから交通安全に対しての意識を持たせておけば大人になってから交通安全を遵守するナイスなやつになるんじゃねえの？という目的だったのだろう。ちなみに私の同級生でひき逃げ事件を起こして捕まったやつがいるよ。おまわりさんたちさあ、お前らの指導、無駄だったみたいだよっ！その時間に婦警のおばさんが私たちに言った。そのときは自転車の乗り方についてのお話をされていた。私はとても真面目に聞いていた。「あのね、自転車って漢字で書いてごらん。最後に車って漢字がつくでしょ。だから本当は自転車は車道を走らなければいけないの」それを聞いて私は言いましたよ。ちゃんと手を挙げて言いましたよ。「じゃあてめえ今すぐ車道で乳母車乗り回してこいよ。今すぐ乳母車で高速のって１２０キロで疾走してこいよ。体中に風を感じてこいよ。やれよさっさとやれよ。殺すぞ殺すぞあああああっっっ！！！」と半狂乱になって婦警さんに言いました。うん、いい思い出だ。夏が過ぎ風あざむ麗しき私の少年時代。お・も・ひ・で。婦警さんとしては、自転車は本来車道を走んなきゃだけどそれも危ないから歩道で乗るのもしゃあないけど歩道を走るのも危ないことだからめっさ注意してねって言いたかったのだろう。車がどうとか子

供だまし言うから悪いんだな。そう、子供が相手だから子供向けな話になるのはしょうがないけど子供だましはいけないなあ。

「〜〜の日」とかいうのも全部子供だましだね。俺から見たらね。さっきクリスマスって単語でたけど１２月２５日にイエスが生まれたなんて聖書のどこにも書いてないし。そもそもそのへんの大工の息子の誕生日なんていちいち記録に残ってないし。「交通安全週間」なんてだめ。ぜんぜんだめ。だめっぷりがすごいよ。あんたチャンピオンだよ。だめ世界に君臨するだめチャンピオン。なんか交通安全週間だとやたら町でおまわりがうろうろしてちょっとした違反とかもガンガンにとりしまってる。ほとんどいちゃもんみたなってる。百歩譲ってまあそれはよしとしよう。それで交通事故がなくなるならめでたい。祭りなみにめでたい。わっしょいわっしょい。でもふと考える。交通安全週間じゃないときに家族を交通事故で失った人はこれを見てどう思うのかなあ。まあ思うだろう。「いっつもやっとけ」

１２月１日はエイズの日。ある方がいっていた。この日が嫌いだと。なんかこの日になると思い出したように国のなんかの団体が「エイズ撲滅」とか言いつつ街中でコンドーム配るんだそうな。これにしても「いっつもやっとけ」って話である。エイズに感染した人にとっては毎日が「エイズの日」なわけである。年に一日だけどうこうやって、それでなんかいいことした、仕事した、みたいになってるやつらが嫌いなのだそうだ。とてもその気持ちはよくわかる。

阪神淡路大震災から〜年たちました、なくなられた方のご冥福をお祈りします、とか言うのも嫌だ。嫌っていうのとはまた違うかも。本心からその言葉がでてくるならいいけれど。ていうか本心からそう思っている人は毎日冥福を祈ってるんだけどね。テレビのキャスターとかこの言葉を発して５秒後に「さてさて次のニュースは〜」とかほざいて満面の笑みを浮かべながら、事務所のごり押しだけで有名になっただけの何の才能もない馬鹿な女優とか歌手が、社会人として完全に終わってるけど芸能人（笑）として浮き草稼業を恥ずかしげもなくやってますみたいな男とくっついただの別れただのという、公共電波にのせて発信するのはほとんど犯罪なんじゃないかと思うような下らない事柄を報じたりする。震災のことなんてどうでもいいと思ってるようにしか見えないよね。むかつくよね。

予言、というか断言する。数年後には３月１１日も、言葉上でだけ適当に深刻にしゃべってそれで満足しちゃう馬鹿でこの国は溢れる。下手したらすでにあふれてる。深刻ぶって心にもないこと言って体裁を保ってそれでなにか自分をすばらしい人間みたいに錯覚する馬鹿。そんなやつらはもうしゃべるな。もう口を開くな。消えてなくなれ。

さて今日２月１６日寒天の日。山のように盛られていた寒天ももうもはやない。ごみにだしちゃったから。心が晴れ晴れとしている。天気は悪いけど。わろしだけど。はは、わろす。最後に書き記しておかねばならない。「〜〜の日」なんて無駄だと声高に主張しているのは別におとといのバレンタインデーでどの女性も誰一人としてチョコレートをくれないばかりか話しかけても一言の返事もしてくれない、という憂き目にあったからではない。ではない。２回も否定してしまうくらいそんなことはない。そもそもおとといに限らずいままで生きてきて経験したバレンタインデーすべてでそんな目にあっているからではない。まあバレンタインもただの子供だましだし無意味なんだけどなっ！何故だかちょっと泣けてきたけどなっ！！

「昆虫バンジー」　東町健太

　アフリカのある部族では一定の年齢に達した者は長いひもを腰に巻きつけ、高いがけの上から飛び降りる、いわゆるバンジージャンプのようなことをしなくてはいけないらしい。今日本に暮らす私たちがバンジージャンプと聞けば「スリル満点じゃん。いいじゃん」と思うかもしれないがそうではない。これは成人になるための儀式であって、「俺無理っす。マジこわいっす。」などとほざく者はもう成人として認められない。「人と成る」と書いて成人である。成人として認められないものは人未満、簡単に言えば虫である。このバンジーをクリアできない虫はその部族の中でつまはじきにされ、何か発言しようものなら「虫のくせにうるせえよ」「くせえよ、虫はくせえんだよ」などと言われて殴る蹴るの暴行をくわえられたりする。家に火をつけられたりする。だれしも虫でなく人間になりたいから皆そのバンジーをクリアするために幼きころから精神面を鍛え、鍛錬を積む。その鍛錬の結果として立派に鍛えあがった強靭な精神力をもつことができ、バンジーをクリアしてその者は成人になれるのである。

　日本ではどうだろうか。日本では二十歳になった時点で誰であっても成人として認められる。バンジーなんかする必要はない。やっほう！近代国家ニッポン万歳！と喜びたいところだがすこし考えてみたい。本当にいいのだろうか？

　自分の周りにいる「成人」の皆さんを思い浮かべてみた。勤務中に仕事そっちのけで私に「勤行はいいよ～勤行したら心がすうってなるよ～」と得体の知れないものを勧めてくるばあさん。「ちょっとチベットいってくる」といいのこしてそのまま消息不明になった友人。大学七年生になっていまだに卒業に必要な単位を取れていない高校のクラスメート。自分で自分の食い扶持も稼いだこともないくせに何故かわかったようなツラをして自信満々に社会を語ってるやつ、就職活動中の学生とかに多いけど。こいつらは本当に「人」に「成って」いると言えるのだろうか？虫なのではないだろうか？極端な例ばかり挙げたけれども、テレビをつけて国会中継を見ていると、どうも虫にしか見えないような先生方もちらほら見受けられる。しかも総理大臣だったりもする。ワイドショーで誰と誰が熱愛中でどうのこうのと嬉々としてしゃべっているのは完全な虫である。もはやハエである。まあそういう私もまた虫だったりするのだけど。このようにとうてい成人にはなれていない、すなわち虫である連中が成人面して選挙で投票したりするのである。これはちょっとヤバイんじゃないの？と思う。

　じゃあどうすんだよ、という話になるわけだが、そこはやっぱり教育なのかな、と思う。ちゃんと人に成れるよう、虫たちを教育するのだ。それには学校もそうだが、なによりも家庭での教育が大切だと思う。

　親の愛は海より深い、みたいな言葉もある。親としては自分の子供を虫ではなく人にしたいと願うからどうにかして子供に教育を施そうとする。しかし、親による虐待、また親に突然の不幸があったりして、家族とともに暮らせない子供なんかもいると聞く。痛ましいことである。残念なことである。しかし、この日本という国はそんな彼らのために「里親制度」という素晴らしい制度をつくった。すなわち裕福な立場にいる富豪に家族とともに暮らせない子供たちを引き取ってもらい、彼らに家庭での教育を担ってもらおうという制度である。なんて素晴らしい制度だろうか。ナイスなことこのうえない。いろんな新興宗教団体がこの制度をバンバン悪用して、幼い子供たちをガチガチに洗脳しているという事実もあるが、とにかく最高だ！

　現実問題、今この社会のかなりの割合を人ではなく虫が占めている。そして虫なので群れたりする。右と左に分かれて群れている。群れからはぐれると何もできないくせに自分だけはいっぱしの人間だと思ってる。そんなしょうもない虫たちの集団の中で、他の虫より優位に立つためだけに足を引っ張り合って貶めあっている。居酒屋なんかで虫同士の会話を聞いているとおもしろい。延々自分たちの所属している群れへの不平不満、群れの中にいる弱者へのあざけり、根拠のない虫けららしい噂話、そんなのばかり。自分が虫けらだと気づく、それこそが「人」に「成る」ための第一歩なのに、「自分だけは正しい人間だ」と思い込むバカが多すぎる。自分の「正しさ」を確信した瞬間、過ちが生まれるということがわかってないやつはもう害悪を通り越して哀れだ。例を挙げるとA日新聞に投書とかしてるじいさんは哀れだ。捕鯨船に嫌がらせするのを生きがいにしてるやつ。「環境保護」だの「人権」だの、綺麗っぽく聞こえるお題目をとなえているけれど実態はただ活動するためだけに活動してるやつ。こんなやつらは無残としか言いようがない。こいつらに言いたい。「虫のくせにうるせえよ」「くせえよ、虫はくせえんだよ。」

「八百万の悪魔」　鶴首

タイトルに「八百万の」と付けたので我が国の多神教・神道についてまず考察していきたい。古の狩猟・採集時代から農耕・牧畜時代に移ると、作物を実らせてくれる自然こそが精霊として崇拝対象となってきた。これが神道以前のジャパニーズ・トラディショナル・アニミズムであり、無生物を含めたすべてのものに魂が宿るという思想があった。しかし、弥生時代から飛鳥時代に移るにつれて、「人が触れることのできる神」という存在が確立されてきて、ついに律令制で神道が制度化された。天照大御神の誕生とともに、神は擬人化され、八百万の神が万物に宿るものとされてきた。私はそれ以後のことについては知識不足なのだが、神道はどうも柔軟な宗教みたいで、仏教、陰陽道、儒教などから影響を受け、少しずつ変化してきたらしい。そして敗戦後、国家主義から民主主義になると同時に制度化された神道が消滅したばかりで、現在それから１００年の時も経っていない。宗教的自由がもたらされるという大きな変化が起きた時代に我々は生きているといえる。

ここには大きな落とし穴がある。国家主義から民主主義になってしまったので、国家レベルでの思想のフィルターが取り払われてしまったのである。島嶼国のくせにそれ以外の貿易も何もかも海外に向けて開けっぴろげになっているもんだ。鎖国すれば圧死してしまうのでそれよりはいいが、こうなっては日本人一人一人の心にフィルターが必要になってくる。例えば、「『勿体ない』という概念などの海外から称賛されるせっかくのアニミズム精神が、どこかのわけのわからぬ新興宗教勢力の侵略を受けたりしていいのか」といったような問題意識を各個人が持たなければ日本人のアイデンティティはやがて崩壊に向かう。５０年後の未来には人口が急激に減少する、ってことが言われているが５０年も経たないうちに日本が潰れている可能性さえある。そうは言ってもすでに染まりかけている国内勢力が大多数あり国がどこへ向かえばいいか分からなくなっているような状態なので、日本に諦めをつけてしまう風潮もあるようだが、それこそ「勿体ない」と思う。神風特攻隊を見倣って、死ぬまでエセ資本主義国家日本国に尽くすのが私のカタルシスである。

さて、神道の話に戻るが、清浄主義というのがある。ゴミや不要なもの、排泄物などには悪魔が宿るという考え方があったので、日本人には綺麗好き、潔癖な人が多い。ただし、何でも使えないものは排除する、という考え方には必ずしも納得がいかないところがある。そういった、「悪魔を根絶する」効率化を派手に突き進めてきた結果、我々は未来世代に残っていたと思われる環境を破壊する悪魔になっているのである。更にたちの悪いことに、未来世代が我々に罰を与えることができない、という世代間の倫理の問題もある。それゆえに、我々は皆、「轢き逃げ」に近い罪を犯している悪魔、という見方もできる。また、少なくとも自分自身が正義だという発想はどんな身分になってもしたくないものだ。正義だと思っている人に限って殺人などの犯罪が報道されたときに「自分とは関係ないから」で済ます。確かに関係ないと思えるかもしれないが、それで片づけてしまったら報道の意味がない。人と人をつなぐネットワークは、例え引きこもりが関与していようが非常に開放的なので、自分の知人の知人の知人の知人の知人の知人の知人が犯人である可能性は十分あるわけで、「犯行動機に何も影響を与えてない」なんてことはないはず。

それゆえに、あえて清浄主義に反する意味で、「ゴミに権利を！」と言っておきたい。「塵も積もれば山となる」という諺もあるが、どんなゴミにも使い道がある。今の石油ももともとはゴミだったのだから。ましてや勝手にゴミと悪魔を決めつけて排除しようなんて発想は危険である。例えその決めつけをする人数が大多数であろうと、「主観」でしかない。多数決の原理は恐ろしいもので、表向きでは「少数意見を尊重しよう」なんて言われていても、少数意見は「無視」されることが多々で、多数意見があたかも「正しい」ように扱われるのも多々ある。アメリカの白人による黒人の差別もそうだったし、「ゴキブリなんて世の中に必要ないよね」って話を聞いても不快。これは、私が今になって不遇な立場になったからではない。中学生時代にゴミ扱いされ、仕返しをして誰かをゴミにしようとする気にもならないヘタレな立場にいたからで、それから必死にエコロジー、アニミズムに思いを馳せてきたからであり、今もどうにか「それらとともに」市民権を得るために奮闘しているのだ。

そうはいっても清浄主義も心の安らぎを与える意味ではすごく重要であり、綿密な分析力、精神的忍耐力を維持する

ためには特に身辺の整理はできていたほうがいい。私は整理が苦手なのでこのことで苦悩したが、ある一つの価値観に達した。「両生類」的価値観だ。「酒は飲んでも飲まれるな」と良く言うが、それに近いところがある。「悪魔に関わり、悪魔に取りつかれるな」というものである。稲妻を崇拝しながらもわざわざ稲妻に打たれない、雨乞いをしても雨に打たれてびしょ濡れにならない、山に祈っても雪崩に巻き込まれない、海水浴をしても溺れない、焚火で温まっても燃やされない、っていうのが私の思う「両生類」的価値観である。日本の家が西洋の家に比べて外界に対して「開けている」というのも、「ゴミや埃を中に入れやすく、外に出しやすい」という点でそうかもしれない。私は大学１年のときにとあるカルト団体に勧誘されてついていったが、その後帰って来ることができたのはこういった「両生類」的価値観があったからだと思う。とあるセミナーで「世代間倫理」に関しての話題を投げかけたら皆さん怪訝そうな顔をしていたのでこちらも怪訝そうな顔をして縁を切ってやった。

　さて、「わざわざ不浄物、悪魔と関わるのに無駄な時間とエネルギーを割く必要があるか」と疑問に思うことも多いだろうとは思う。「役に立たないものはゴミ、ゴミはすぐ排除」というようなロボットみたいな思考は楽で効率的だからだ。世のため人のため「楽をするな」なんて精神論を誰に言われようが、素直に受け入れたくないのは事実。それでも私が不浄物や悪魔に関わりたいのは「単に面白いから」。この面白さというのは、旅をするような面白さに似ている。それも、携帯不携帯で電車に乗り辿り着いた見知らぬ田舎の駅からの歩きの一人旅のような面白さ。悪魔に正面から関わろうとしたその瞬間（駅から歩きだした瞬間）から、色々なものに対しての洞察力が高まり、世界が鮮やかに見えるものだ。私もカルト団体をやめた後の世界は、それ以前の世界よりも鮮やかに生き生きと見えているので、そういった意味ではその団体には感謝している。また、一度大きなスリルを味わうと色々なことに対して免疫力がつくというのもある。新宿の歌舞伎町周辺で野宿をして以来、どんな闇を歩くにも全く恐怖心がなくなった、というのもある。小学生の時、「夜に墓の前を通ったらおばけに襲われて死んじゃうよー！死にたくないよー！」と大泣きした自分と同一人物とはとても思えないだろう。

　まともなことだけに関与しているだけでは、まともなことしかできない人間になってしまう。自分はそういった無個性な人間になりたいとは思わない。万物に神が宿るとは思いたくないが、万物が「いとおしい」悪魔ちゃんだと思って「ツンデレ」もしくは「デレツン」なスタンスで向き合っていきたいと思う。

「青臭すぎて、鼻もげる！～わが青春のＲＡＳ～」　オパーリン

　２０１２年２月５日、この日は長く居座っていた寒波が去ったのか何なのか、朝から太陽が照っていて幾ばくか暖かかった。「あ、今日はもしかしたら原チャに乗れるかもしれないなぁ」と、非常に間違った考えが僕の頭の中にほんの微かによぎってしまった。これが全ての間違いであることは、過去の経験から十分学んできたはずである。はずである・・・。冬に原チャでの遠出は命取りになると。
　この前、大手出版社の会社説明会で「愚者は経験から学び、賢者は歴史から学ぶ」のど偉い編集者さんこれまた大層に有名らしい言葉を引用して話していた。その時分は「ふーん、じゃあ僕は愚者だなあ。愚者上等だぜ！」とか思っていたのだが、どうやら僕は経験からすら学べないらしい。そんな僕は何なんだろう。下痢便とか虫けらとか、そういった類のものなんだろう。まあ、仕方がない。
　そんな下痢便の僕ではあるが、今回は少しばかりは学ばせてもらった。「１人はまずい。どうせ痛い目をみるならば、巻き添えがいた方がいい」と思ったのである。なんとも下衆な下痢便である。という事で、バイクを持っている友人に電話し、同行を要請した。この友人（仮称Ｓ）も下痢便の友人になってしまう様な残念な男であるから、僕の要請に難色を示すこともなく「お、いいよ」と同行を了承した。かくして「筑波山、死の彷徨」が決行となったわけである。
　ツーリングに関してはあまりに辛かったので詳しくは書かない、思い出したくもないからだ。とにかく、僕とＳは体温を吸い尽され、命からがらＳ宅まで帰ってきた。Ｓがローズヒップティーなるオサレな暖かい飲み物を入れてくれる。二人ともそれを飲んで少し温まったところで、Ｓがおもむろにギターを手にとって弾き出した。ジャカジャカとコードを掻き鳴らし、何やら歌い出す。歌い出す。
　その「何やら」、Ｓが歌っているその歌、どうも聞き憶えがある。Ｓは訳ありげに僕の方をチラチラと見ながら、なおも歌い続ける。
「できない訳じゃない、やろうと思えばぁあああぁーーー♪」
その歌詞にハッとする。ハッキリと思いだした。曲名は「反抗と純情～中二病患者の歌～」だ。ああ、この曲、俺も歌ったことあるわ。というか、この曲、俺が作った曲だったわ。赤面、である。
　僕とＳは嘗て、大学生の頃、バンドサークルに所属していた。そしてバンドを組んでいたのだ。バンド名はＲＡＳ（ロックアンドシャウツ）、Ｓはギター、僕がボーカル、作詞、作曲を担当していた。完全に自演乙なオナニーバンドであった。脳の奥底に封印せれていた記憶が次々に蘇ってくる。黒歴史、そう呼ぶ他ない過去。
　我らが青春のバンド「ＲＡＳ」は恐らく２００７年の冬、僕とＳが大学１年生の時に唐突に結成された。僕が夜中に曲を作り、出来上がった喜びで恍惚、茫然自失となり、Ｓの部屋に押し掛け、何故か野外でＳに弾き語りでその曲を披露したのだ。あの時、もしＳが常識的そして正直に「夜中に押しかけるとかあり得ない」とか「お前の歌、ゴミだよ」とか言っていれば、ＲＡＳは存在しなかったはずだ。眠たい目をこすりながらもＳは「いい曲じゃん」と言ってくれた。それが全ての始まりである。
　その後、僕とＳは他のメンバー２人を集めて、活動を開始した。ＲＡＳは恐らく１年余りの間活動し、自然と消滅した。その間に僕は多分５曲ぐらいの曲と詞を作った。ライブは毎回、僕以外のメンバー、客の全員がずっと黙っていた。１年で才能が無いと気付いて良かったというものである。客に感謝している。
　と、回想、回顧はこのくらいにしておいて、場面はＳの部屋に戻る。Ｓは相変わらず僕の作った歌を歌っている。僕は恥ずかしく思いながらも、まんざらでもないい気分。
「よく憶えてるな、そんなもん。それにしても懐かしいなぁ」
なぞと悪態を吐いて照れ隠し。もう一本のギターを手にとって一緒に歌い出す。が、歌詞もコードも一つも憶えていない。
と、Ｓが
「歌詞カードあるぜ」
そう言って机からファイルを取り出す。なんと物もちの良い男であろうか。当時僕が書いた手書きの歌詞カードを取り出す。
　こうなれば自棄っぱち。恥の上塗り上等である。生みの親に忘れられていた歌も、友人に守られ、愛され、幸せ者である。音痴が二人、声を張る。

ＲＡＳ　ＮＥＶＥＲ　ＥＮＤ・・・

と美しく締めたい所だが、ここまできたらもうひと恥掻いてやろうと思うのが僕の性分である。Ｓ宅に保管されていた歌詞カードを借り受けてきたので、一挙公開する。

「悪友（ダチ）」
作詞・作曲　オパーリン

いつも君は　斜に構えて、 変わらぬ自分を生きてたね
そんな君を後ろから いつもまぶしげに見つめてたよ
あの頃僕が君に何言っても、君は馬鹿にしていた
そんな感じだった
修学旅行のある晩に 、君とお風呂でタバコを吸ったね
それから君はうち解けて初めて自分を見せてくれたね
それから何か疑問がある時はいつも君に相談してたね
僕らどこに行けばいいのかわからず、
明日をただ見つめていた
悲しいことが僕らを包んで、
悲しいままに僕らは受け入れた
そして時がたち、僕は歩いている、君とは違う道を
それでも、あの日のことは今日のよう
昨日見ていた青い青い明日が、
今じゃこんなに霞んじまってる
僕ら思ってた、正しくありたいと、
そして自分を吐き出したいと
二人で公園に行ったあの日タバコふかした、
必死で何かに　あらがってた
君のライブに行っては、みんなで暴れて叫んでた
その時みんなが一つになって、大きな何かがうねってた
あの時僕も音楽やりたいと、強く強く思ったんだ
僕らどこに行けばいいのかわからず、
明日をただ見つめていた
悲しいことが僕らを包んで、
悲しいままに僕らは受け入れた
そして時がたち、僕は歩いている、君とは違う道を。
それでも、あの日のことは今日のよう
昨日見ていた青い青い明日が、
今じゃこんなに霞んじまってる
僕ら思ってた、正しくありたいと、
そして自分を吐き出したいと
二人で公園に行ったあの日、タバコふかした
必死で何かにあらがってた

「前進反省」

作詞・作曲　オパーリン

洗濯物が干してある
ベランダに出て煙草に火をつける
冷たい夜に息を吸って 煙を一緒に吐き出せば
もの悲しさに酔っては、秋なんだなと思う
消えてゆく煙見つめ 己の孤独を感じる
きっとしばらくすると冬がきて
僕はそのとき笑えてるかな
孤独なメリークリスマス、そんなのイヤだな
イエスが生まれた記念日なのに
僕の優しさなんて物は ただの一人芝居だ
「あなた」知りたいという思いも
欲望のカモフラージュで
自分を遠いとこから見つめれば、
僕は勝手な野郎だったね
被害者気取ってても、端から見ればお前
哀れで惨めなやつ
「あなた」を求めて焦る心を抱き、
己見失い、「あなた」を無くした
届かぬ思いは愚かな欺瞞で
戻れないゆえに歩くのだ
我が背に見ゆるその道は
過去と呼ぶにはあまりにも新しすぎて
振り返り見れば、それは誤りに満ちた日々で
かといって、やり直しても同じ事をしただろう
だから、どこにもたどりつけずとも 僕は只々歩いていく
他人に否定されて傷ついても 僕はそれでも歩いていく

「日だまりの歌」
作詞・作曲　オパーリン

なにげない友との会話や、笑い声にうっとうしさ感じて、
それでいて本当は寂しい、そんな僕ではあるけど
今日此処に立っていること、今息を吸っていること、
そのことに心弾むような、そんなヒトでありたい
だけど日々の暮らしは僕を退屈地獄に落とすから、
何にもしないで腐っているダメダメな僕だよ
ダカラせめて君に叫んだ歌は忘れずにいたい。
そして歌に込めたこの思いだけ、君に届いてよ。
人の存在は罪、そうだとしても、心の底に隠してある
人間としての源は、本当はすばらしい
汚いことも弱かったことさえ許されるだろう。
冬の小さな日だまりの中では、すべてはすばらしい。

『スイミー』
作詞・作曲　オパーリン

みんなと違う、そのことがとてもとてもとても嫌だった
みんなと違う、そのことで心が傷ついて自信を無くしてた。
僕が何しても、答えは出なかった
「ああ、こんなくだらねえ世界で」そうぼやいていた。
いじけてる馬鹿な僕を見て、笑いながら君は僕に言った
「弱さから逃げているお前に、
特別なモノなどあるはずないだろ」
僕はうつむいて、下唇噛んだ
じゃあ、どうすれば、僕は泳げるの？輝く貴方みたいに。
I swim in the sea　僕は泳いだ
I swim in the sea　暗い自分の中を
I swim in the sea
泳ぐことでしか、小さな自分を繋ぎ止められなかった。
I swim,I swim,I swim in the sea. Wow,yeah.
My name is スイミー、だから I swim in the sea.
Wow,my name is スイミー
みんなと違う、そのことに、こだわり過ぎてた
自分見失っていた
自分を見詰め続けることで、
答えは出ずとも泳ぎ続けられる
僕は目になろう。心の眼になろう
ああ、この黒い身体の色は、僕が僕であるためのシルシ
I swim in the sea　僕は泳いだ
I swim in the sea　暗い海の中を
I swim in the sea　僕の名前は
I swim in the sea　体の黒いスイミー
I swim,I swim,I swim in the sea. Wow,yeah.
My name is スイミー、だから I swim in the sea.
Wow,my name is スイミー

「マゾが逝く」
作詞・作曲　オパーリン

見えない傷を抱えて、君は何を見つめていたの？
そばに僕がいるときでも、君は僕を見てはいない
（君に）見えない僕は何を、君の代わりに愛そうかなぁ・・・
弱い僕を、強くなれなかった僕を抱きしめてほしい、君に。
可愛い君は（まるで）猫の死体（のようだ）
（君から）受けた傷はたとえ消えないとしても、
いいさ、君が愛しいから
他人（ヒト）がどうとか、カッコ悪いとか、
そんなことはどうだっていいよ。

きみがそばにいてくれたら
君にソッポを向かれると、僕の存在は消えちまう
そうさ世の中は何の意味も無い刑務所さ
僕の心は騒ぎ出し、もうコントロールが効かない
君をいつか殺してしまいそうだ・・・どうしよう
それもこれも、元はといえば、
僕が君に何かを求めてしまった
それがそもそもの間違いだったんだ
さあ僕を殺してくれ、殺してくれェーー！！！
弱い僕を、強くなれなかった僕を、虐めてほしい、君に
醜い僕も（まるで）猫の死体（のようだ）
傷をつけて（ください）、僕に喜びを与えて（ください）。
欲しい、生きてる実感が

「根無し草」
作詞・作曲　オパーリン

世の中の何を信じて、 僕の中の何を信じる？
君が僕を拒んでいるから、僕が生きてる証は無いんだ
君が僕を拒んでいるから、僕が生きてる証はないんだね
本当の正しさ求めても　心は苦しくて ドコまで歩けば、魂が安らぐ時は来る？
どこだ、どこだ、此処はドコだ？ 出口が見つからない
欲しい、欲しい、答えが欲しい、生きる答えが欲しい
本当の正しさ求めても　心は苦しくて
ドコまで歩けば、魂が安らぐ時は来る？
悲しみも、何もかもわすれたら、こっちにおいで
可愛い君が、そう囁いた 、僕の中でそう囁いた
可愛い君が、そう囁いた 、僕の中で　そう囁いた
溢れる何かに抗えず、 君には抗えない
愚かな僕が何をしても、　君には抗えない
寒い、寒い、心が寒い、僕を　愛してくれよ…
欲しい、欲しい、オマエが欲しい、僕に　全てをくれよ…
オイラの心は根無し草、オイラは間違っているのか？
オイラは無意味なのか？ そう君に問いかける
けど、君は答えない
自らに問いかける 答えなど何もない…
寒い、寒い、心が寒い、僕を愛してくれよ…
欲しい、欲しい、オマエが欲しい、僕に全てをくれよ…
溢れる何かに抗えず、君には抗えない
愚かな僕が何をしても、君には抗えない
オイラの心は根無し草、オイラは間違っているのか？
オイラは無意味なのか？そう君に問いかける
けど、君は答えない
自らに問いかける、答えなど何もない…

「寂しい街には雨が降っているネ」
作詞・作曲　オパーリン

止まない雨がシトシトと、僕の心を冷やしてゆくよ。
傘も差さずに歩いたら、濡れちまうけど、
それでも構わない。
汚い街をトボトボと、僕は一人で歩いているよ。
よそ者をねめつけている人の目が、突き刺さるから。
僕は何を探していたの？
僕は何を求めているの？
そんな事が分からずに、下を見ては怯えているの。
ああ、Tell me!! Help me!! Give me!! Love me!!
Help me!! Oh Love me Yeah!!
ああ、僕が信じた全ては幻だったとしたら、
何を見ればいい？
酒に溺れて堕ちてゆく、荒んだ日々の中であの人は、
一体何を見つけたのか？何を捨てたのか？僕は知らない。
生きている様に死んでいる人か、
死んだ様に生きている人か、
どちらが真に生きているのか、僕は問う、自らの中に。
ああ、Tell me!! Help me!! Give me!! Love me!!
Help me!! Oh Love me Yeah!!
ああ、僕が信じた全ては幻だったとしたら、
何を見ればいいか分からずに、
僕は街を歩いて行く。
それでも雨は止まずに、街に降るよ。
止まない雨がシトシトと、僕の心を冷やしてゆくよ。
傘も差さずに歩いたら、濡れちまう。

「反抗と純情～中二病患者の歌～」
作詞・作曲　オパーリン

できない訳じゃない、やろうと思えば。
ただ、お前らみたいになりたくはないだけさ。
ふてくされているんじゃない、イライラするでもない。
ただお前等みたいなヘラヘラは嫌なのさ。
学校の先生や、上辺だけの友は、
ただ真っ直ぐな、君と僕を捨てたから、
僕はあいつ等を絶対に許さない。
僕はあいつ等に、唾吐いて、
蹴飛ばして、ぶん殴ってやる！！
「もう泣いてないで笑おう？」って言う君の笑顔は、
涙でグシャグシャで悲しそうだったから、
もう泣いてなんていられないよ。さあ笑おう、
二人だけの世界で。

僕等の世界はどこへでも行けるのだろうか？
僕らが歩けば道ができ、夢かなう日くるのでしょうか？
神様教えてくださいな。僕たちは間違っているのか？
本当を求めて進むことが、間違いというのでしょうか？
みんなに笑顔の君の影は、
とっても哀しげで、胸が痛い。
「淋しくなんかない」そんなのウソだ。
空っぽの君の手を握り締めたい。

以上、暗黒史放出完了。

「祖母の死とその周辺」　オパーリン

　集英社の作文用に作ったのだが、あまりに良い出来だったので載せることにした。この作文に書いたテーマは、いずれは小説として書いてみたいと思っている。家族が生きているうちはきついかもしれないけれども。

　「イワシ、イワシがいる・・・。」
　祖母は体中にチューブを繋がれ、やせ細った身体をベットに横たえ、虚ろな視線を空中に泳がせながらそう言った。ゆっくりと布団から手を出し、筋張った指でイワシの在処を指し示す。僕は祖母の指が指し示す方を見やる。そこには何もない。僕にはイワシは見えない。「ばあちゃん、イワシはいないよ。」僕は祖母にそう伝える。しかし祖母は「イワシが、イワシが」とまだイワシにとらわれている様だ。
　「ばあちゃん、また来るね。じゃあね。」そう言って病室を出た。実家いたいと最後までごねていた祖母は、半ば強引に特別養護老人ホームに入れられてから一気に痴呆が進んだ様に思えた。お見舞いに行って病室で話しかけても、反応が返ってこなくなってしまった。孫がお見舞いに来ている事が分かっていないんじゃないかと思う。
　介護ストレスで母は半狂乱になり、父は寡黙になった。祖母の死後、遺産のトラブルもあり、一部の親族とは絶縁状態になった。僕が高校二年生の時の話である。
　あれからもう６年以上の時が経った。僕の家族は表向きの平穏は取り戻した様に思う。でも、もう決して戻らない、あの時に決定的に壊れてしまったものもある。僕はそう思う。
　僕はこの先、誰かを愛して、家庭を築く事ができるだろうか。不安ではあるが、それでも時は勝手に過ぎる。なる様にしかならない。そう開き直って生きる事にする。

「「アンパンマンとキリスト教」多良鼓さんへの感想――弦楽器イルカより」　弦楽器イルカ

本誌１月号掲載の多良鼓氏執筆記事「アンパンマンとキリスト教」に、本誌執筆者の弦楽器イルカ氏から送られた感想文。その感想が面白かったので、オパーリンの判断で両氏に許可を取り、記事として掲載することにした。

・「アンパンマンとキリスト教」多良鼓さんへの感想

――弦楽器イルカより

難しいテーマを扱ったチャレンジングな記事だと感心致しました。個人的には、宗教、その中でも最大手、業界トップシェアを誇るキリスト教を論じるのは私にはハードルが高く尻込みしちゃうので、「よく書いたなあ」というのが素直な感想です。

私はキリスト教そのものに対してあまり知識も思い入れもないのですが、高校の頃、田川健三『イエスという男』他何作か、イエスという人の生き様について書かれた著作を読んだことがあります。ご存じかもですがざっくり一言でまとめると、「自己犠牲や献身、神についての教えはイエスの死後、権力者によって作られた虚像で、イエス自身は権力に対して逆説的な反抗者で、皮肉をこめた説教で民衆を鼓舞し権力側と戦った革命家の側面が強く、だからこそ権力に殺された人物だった」という内容です。ある程度メジャーな考えになりつつあると大学時代、講師に聞きましたが、当時は新鮮かつ刺激的で説得力のあるイエス論と感じました。

また、アンパンマンはもともと、戦争を体験した作者の「究極の正義とはひもじい人に食べ物を与えることだ」という信念のもと、カッコよく戦って勝つことが主題の特撮ヒーローに対するアンチテーゼとして、カッコ悪いおっさんがアンパンを届けに行って高射砲で撃ち落とされる話が始まりと聞いています。はじめは全く人気がなく、様々な改良を加えバイキンマンが登場して今の路線になるまで5年以上かかりましたが、作者の反骨精神が実って日の目をみた作品であるようです。そういった観点からイエスとアンパンマンについて考えるとまた少し面白いかな、と個人的には思いました。余計なことを書いていたらすみません。それでは、次の記事を楽しみにしています。

「渋谷道玄坂劇場（ストリップ）」　オパーリン

２０１２年２月１０日（金）。ユーロスペースで死刑映画週間という企画があり、『ＢＯＸ　袴田事件　命とは』が上映される回のトークショウに森達也氏がゲストとして講演するという事で、この日は朝から渋谷にいた。ユーロスペースの開場と同時に整理券を購入。数日前に下調べに来た時に「早めに当日券を買っておいてください」との説明を受けていたのだが、トークショウが午後６時１５分からという事もあってか、整理券番号１をゲットできてしまった。なんかめっちゃ張り切ってる人みたいになってしまった。

整理券（当日券）を買ったのが１１時頃だったので、映画が始まるまで７時間も時間がある。渋谷の街をぶらつく事にした。暫くぶらついた後、事前予習として森達也著『死刑』を読みたかったので名曲喫茶ライオンに入った。ライオンへは以前健太さんに連れられて行った事があったので二回目。ライオンは静かでいいんだよね、読書が捗る。都会の喧騒の只中にポツネンと、静寂のオアシス。

２時間程して腰が痛くなったのでライオンを出る。すぐ近くにストリップ小屋があったので何となく看板に目をやる。午後１時までに入れば学生料金、早割で２０００円で入れることが判明する。そう言えばストリップは見たこと無かったなあ、と思う。

気付けば暖簾をくぐっていた。受付の小窓で２０００円を支払い、ステージは地下にあるそうなので階段を下りる。ドンドンと防音扉を通り抜けてドラムの音が聞こえてくる。

防音扉を開けて中に入る。途端、視界に裸体が飛び込んできた。想像していたよりもステージと客席の距離が近かった。普通のステージから花道みたいなのが伸びていて、その先に（劇場の真ん中に）回転する円い舞台がくっついている。客席は３，４列しかなくて、円い舞台を中心に円形に配置されている。僕は３列目に座り、全体を観察した。

僕が入った時には、ちょうど二人目の踊り子さんの最後の曲の途中だったらしく、踊り子さんが中央の舞台でブリッジをしながら回転していたのである。１３，４人の観客がいて、客層は（５０歳より上と思われる）おじさんが多く、その中の３、４割はスーツを着ていたので仕事途中のサラリーマンなのだろう。仕事しろよ、おっさん。２０代は僕一人だと思われる。

ストリップの内容は、一人２０分位踊って交代。この日は踊り子さんが全部で６人いて、一人一人順番に踊った後に、最後にみんなで一緒に踊ってフィナーレ、これで一回転。一日で四回転するみたいだ。一人一人の踊りの内容は、最初は衣装を着て出てきて、三曲くらいかけて踊りながら脱ぐ。全裸になった後に一回舞台裏に戻って、最後に一曲分踊る。で、踊りが終わった後に、踊り子さんが出てきて「一緒に写真撮りませんか」みたいな感じで営業する。踊り子さんと一緒に写真を一枚５００円で取れるみたい。写真は劇場が用意したデジカメで撮るだけど、「ポラ（おそらくポラロイドの略称）」って言っていて、昔の名残なんだろうなと思った。

踊り子さんには大体ファンのおじさんが１人２人付いていて、ポラを撮ったり、差し入れのお弁当とかお茶とかをあげていた。

フィナーレでは踊り子さんが全員で踊りながら客席に降りてきて、観客と握手して回っていた。踊り子さんが観客全員と握手して回るので、計６人と握手する事になる。

踊り自体も面白かったのだが、一番面白かったのは１列目の客席に陣取っている観客のおっさんたちである。彼らの視線が半端ない。踊り子さんの局部のみに集中している。回転台が廻るのと一緒に視線が移動する。まさに「釘づけ」という感じ。局部しか見ていないのが面白い。顔とかおっぱいは一切見ない。僕は「局部とか、そんなに見て面白い様なもんではないだろ」と思うのだが、彼らにとってはそうではないらしい。

あと思ったのは、２、３人いた常連っぽいおじさんたちの感じは、秋葉でマイナーなアイドルの追っかけをしている人達と結構似ているんじゃないかなということ。秋葉の方を見たことがないので何とも言えないけれどもさ。劇場の職員の人と仲良く話している感じとか、「ここは俺の居場所だぜ」みたいな感じね。

全体としてなかなか面白かったので、また暇を見つけて他の劇場とかにも行ってみたいと思う。

「若手僧侶による新春説法ナイト」　オパーリン

２０１２年１月２１日、東中野の居酒屋にて（正確な場所は忘れた）。東町健太さん（以降、健太さん）がツイッターか何かでこのイベントを発見し、僕を誘って二人で参加した。新宿に午後４時に集合し、始まるのは午後７時頃だという事で、まずは大久保駅までブラブラと歩いた。健太さんと遊ぶ時はいつもそうなのだが、やたらと歩かされる。目的地が二駅以内の場合は確実に歩かされる。だから、「遊ぶ」と言っても、その遊びの時間の大半は歩いている。目的がない「遊び」の場合はただ歩くだけという時もある。二人で歩きながら、グダグダととりとめのない話をし、途中で寺や神社を見つけると取り敢えず入って見て悪態をつき、道すがら面白い通行人（信号無視をする爺さんとか、派手な格好のデブでブスなババアとか）を見つければ爆笑し悪態をつく。歩き疲れると居酒屋に入り、二人して世の中に呪詛の言葉を吐く。僕はいつもお金がないので、会計はいつも健太さんがかなり多めに払い、僕は「ありがとうございます。いつか返します」と嘘をつく。で帰る。いつもそんな感じだ。

大久保に向かって歩いている途中、健太さんが「今日は面白い場所に連れて行ってあげますよ。」と自信ありげに言う。今日は彼の中で一日の予定が決まっているみたいだ。大久保駅のガード下を抜けてすぐにある小汚い雑居ビルに入る。着いたのは地下一階にある名曲喫茶。店内にはアラーキの写真集がたくさん置いてある。団鬼六とかもある。つまりはＳＭ系のものが沢山飾られている名曲喫茶なのだろう。

濃厚な世界観が凝縮されている。恐らくは店主の女性（年齢不詳）の恰好、話し方もその世界観に統一されている。浮世離れした異空間、店主の牙城、小世界、店内の空気を楽しみながらそんな言葉が思い浮かぶ。

その名曲喫茶に２時間程居座った後、本日のメインイベントの会場に移動を開始する。また徒歩。寒い、雨まで降っている。辛くて仕方がないので「電車に乗りましょうよ」と提案するが健太さんは断固拒絶。凍えながら、悪態をつきながら、歩く。健太さんも寒いらしく、二人してこの異常な「さむみ」に悪態をつく。

東中野駅に到着、開始までまだ時間があるので駅付近のミスドで休憩。ホットミルクを奢ってもらった。ホットミルクを飲みほし、会場の居酒屋に向かう。途中、ポレポレ東中野の前を通ったので何がやっているのか確認、目ぼしいものはなし。

到着。小じんまりした居酒屋。僕達二人以外はみな顔見知りといった感じ。まあ、そうだろうな。二人でアウェー感に耐えつつ開演を待つ。

開演。僧侶が３人出てきて歌みたいな読経（声明というそうだ）を始める。３人で唱えるから声がハモって、聞いていると心地よく眠くなってくる。配られたパンフレットにも「アルファ波が出まくり催眠作用あり」と書いてある。なんだろうな、陶酔というか、そんな感じの気持ちよさなんだよな。

声明の後は「サイコロ説法」なる演目がとり行われた。サイコロに書かれたお題について僧侶の人がアドリブで説法を行うという内容。僧侶の人の説法は結構面白く為になりそうなお話だったのだが、泥酔した女性の観客が逐一口をはさみ、説法の進行を妨害していた。

彼らの説法の中でも特に印象に残ったのは「六塵皆ことごとく文字（もんじ）である」という言葉。意味としては「全てのもの、塵の様な些細なものにさえ仏さまの意思が宿っていますよ。だから無駄なものなんて何もないのですよ」みたいな感じだったと思う。僕も健太さんもこの言葉を曲解し、帰りの間中、「ざまあさらせ、無駄なものなんて無いんじゃ！無駄こそ大事なんじゃ！」と発狂していました。

この僧侶の人達は真言宗豊山派という流派のお坊さんだったのですが、僕の父親の方の家はこの真言宗豊山派を信仰していたという事が後日発覚。世の中どこで繋がっているか分からないな。

「芝浦と場」　オパーリン

　２０１２年２月１５日、芝浦と場（東京都中央卸売市場食肉市場）の見学に行ってきた。まず初めにこの「芝浦と場」の読み方は「しばうらとじょう」である事を記しておく。見学するまで僕はずっと「とば」と読んでいたのだが、どうやらそれはあまり正確ではなかった様だ。この文章を読んだ人の中にももしかすると「とば」と読んでしまう人がいないとも限らないので、最初に注記したのである。
　僕が芝浦と場について初めて知ったのは小林よしのりの『ゴーマニズム宣言』（以降、ゴー宣）を読んでの事だった。どの巻だったかは失念したが、彼はゴー宣「差別論」の中で部落差別問題（芝浦と場）について詳しく紹介していると思われる。僕は差別論は未読で、ゴー宣の本シリーズの中で「差別論」について言及している箇所があり、そこを読んで芝浦と場について知った。
　その後、暫くして森達也の『東京番外地』を読み、その中で芝浦と場や差別に関する章があって、と場に興味を持つに至った。
　と、こうやって文章を書き始めたものの、はっきり言ってこの文章は非常に書きづらい。遅々として進まない。どうやって書けばいいのか分からない。問題が色々と複雑に絡み合っていて、僕の知識不足もあって、「間違った書き方」をしてしまうのが恐ろしくて、そんなこんな諸々がグッチャになって、筆が止まってしまうのだ。現段階において、とてもじゃないが「僕なりの意見」なんてものを書くことができないのだ。思う事は色々とあるのだけれどね。
　なので、まずは見学の流れというか、見学に至るまでの過程や見たことを淡々と書き記そうと思う。まず、『マスコミ就活読本』を刊行している創出版主催の出版志望者のメーリングリストに「芝浦と場の見学」企画を出して参加者を募った。と場内に併設されている「お肉の情報館」だけの見学であれば個人で参加できたのだが、「せり」の見学については団体である必要があったからだ。その結果、１３人の参加希望者が集まった。次に東京都中央卸売市場食肉市場に電話し、見学の日程について決めた。見学日の２週間以上前に話し合う事が必要だったので、電話をしたのは１月の半ばごろだった。
　見学当日、１２時３０分に品川駅に集合した。実際に参加したのは１０人だった。まず初めに豚肉のせりを見学し、次に「食肉加工の過程、食肉の歴史と人権」に関するビデオを見て、最後にと場で働く職員の方の話を聞いた。見学は午後４時ごろに終了し、その後は僕を含めて４人の人と近くの喫茶店に入って話した。

　以上が、実際に起こった事で、まず間違いのないといって差し支えのない事柄。で、ここからなんだよね、問題は。僕が今、実際にどう思っているかはまだ置いといて、見学後に対外的にどんな反応（振る舞い）をしたのか。それについては一つ二つ実例がある。まずは話をしてくれた職員の人にお礼の返事を書いた。そして、参加者を募集したメーリングリストに参加しての感想の報告メールを送った。お礼のメールは個人的なものだから、ここに載せることはしない。なので、メーリスに流した報告メールを下記に引用する。なお、個人情報と思われる箇所については変更した。

「[報告]芝浦と場見学」
　こんばんは。オパーリンです。
　先日（２月１５日）、出版メーリスの有志メンバーで芝浦と場（東京都中央卸売市場食肉市場）の見学に参加しましたので、その内容を報告させて頂きます。
　見学の内容は、
・豚肉のせり場の見学
・食肉加工の過程と差別、人権に関するビデオの視聴
・と場の職員の方による人権、差別に関するお話
と大きく分けて３つの内容でした。
　それぞれについて、具体的な内容と僕が個人的に感じたことを書いていきます。

[豚肉のせり場の見学]
　「せり」と言うと、築地などでの魚のせりの活気にあふれる感じを想像していたのですが、実際の豚肉せり場は比較

的淡々と、静かに行われていました。せりは電光掲示板を見て行っていました。せりに参加できるのは、指定された仲卸業者（３８社）と売買参加者が参加しているそうです。せり場の横には枝肉（背骨の所で半身に加工された肉）を保管する大きな冷蔵室があり、枝肉がずらりと釣り下げられて並べられていました。買いつける人達は事前にこの枝肉を下調べして（買いたいものに目星を付けて）いるので、電光掲示板でのせりが可能になっているみたいです。

［食肉加工の過程と差別人権に関するビデオの視聴］
　工場見学などに行くと見せててもらえるビデオと同じような形式のビデオです。食肉加工の過程が分かりやすく映像で解説されていました。差別、人権のパートでは、食肉処理業務に対する差別や偏見について解説していました。

［と場職員の方による人権、差別に関するお話（人権教育）］
　職員のＡさんという方がお話をしてくださいました。録音は禁止との事だったので、僕が当日にとったメモからポイントを抽出して書きます。

・「屠殺」という言葉は「動物が悲惨に殺されている」というネガティブなイメージでしか使われない、それはと畜に対する仏教的な「穢れ」の思想に起因しており、その暗いイメージがマスコミや小説で使用される事で、何も知らない人にまでと畜に関する偏見が刷り込まれてしまう。マスコミでは呼称を「と場」や「食肉処理場」と変更しているが、言葉を入れ替えれば済む問題ではない。文脈が差別を含むものであるかどうかが問題。
・教科書やマスコミなどで、部落差別や食肉加工の歴史を「正しく」教えていないが為に、差別について認識の無い人が差別的な表現に接すると、それが真実かどうかを判断できないし、差別意識が刷り込まれてしまう。
・私たちは、差別表現や差別に関する「間違った」表現をしたジャーナリストや作家に対しては「糾弾会」を行っている。そうやって「正しい」認識を持ってもらう事で、後々にはその（糾弾された）作家は差別を無くす力になってくれる。（話の中では筑紫哲也氏を例に引いていました）。
・インターネットには部落差別的な表現、書き込みが氾濫しているが、多すぎて削除要請が追いつかない。また、削除要請を聞き入れてくれない事も多い。
・現在の日本では自分の知らない間に第三者（興信所など）に戸籍をとられてしまう可能性がある。それが、部落出身者の結婚、就職差別につながっている。差別に関して「情報開示」を求める人達がいるが、現段階においては被差別部落の場所を公開することなどはそれが新たな差別につながるので、まだ早い。
　などです。あくまでＡさんの話を僕が解釈した内容ですので、一字一句違わずそのままという訳ではありません。「間違った」解釈をしている可能性もあります。悪しからず。気付いた方は指摘してください。
また、一緒に参加した方は、「足りないなあ、違うなあ」と思う所があれば補足、訂正していただけると助かります。
　以下、僕の感想を書きます。
　本当はもっとよく差別について知ってもらいたいのだけれども、その事で新たな差別を産み出してしまうかもしれない。Ａさんの話しぶりから、そう言ったジレンマや苦悩があるんだろうな、と感じました。また、ここでは書きませんでしたが、彼らとイデオロギーとの関係のようなお話もされていました。同和利権についてのお話はされていなかったと思います。
　他には、Ａさんが話しの最後に「（メディアを志望する）貴方達は、中立な視点を持って、自分で検証する姿勢が大切です。僕の話についてもそういう姿勢で聞いた方がいい。間違ってないとは限らない」という様な事をおっしゃっていて、Ａさんのような立場の方から、そういった言葉を聞けたことが意外でした。また、そこに希望の様なものを感じました。
　しかし、メディア、作家への「糾弾」についての話については、難しいな、と思いました。僕自身、この報告書を書くだけで「これでいいのかな、間違ってないかな、誰かを差別して傷つけないかな」とすごく不安になっていますし、筆の進みが鈍ってしまっています。いわゆるメディアの委縮の問題ですが、一つ一つの記事を書いている個人も「怖いな」と思うだろうし、その迷いを振り切って書いたとしても、組織としてのメディアが委縮していればそれを表に出せない。つまり、２重の委縮が働いているんじゃないかと思います。
　だからといて、「表現の自由」を掲げて「糾弾はいけない」というのもおかしい気がします。事実、差別を助長する

表現もありますしね。
　要するに、一人一人の表現従事者、僕たち一人一人が、見つめ、煩悶しながらも考え続けていくしか道はないのかな、と思います。
　以上感想です。
　また、Ａさんが今回の見学に参加した人については、と場の解体現場を見学させて下さるというお話をしてくださいました。せっかくのお話なので、今回参加者の中から参加希望者を募って、Ａさんにお願いしようと思います。
　以上、報告でした。拙い文章で申し訳ありません。
失礼いたします。
オパーリン

　とまあ、これが出版メーリスに流した報告メールである。
　一体何が僕にここまでの書きにくさを感じさせているのか。それは恐らく「間違ってはいけない、正しくなくてはいけない」という意識だ。そして、差別をしようと思ってなくても差別だと言われてしまたっり、実際に差別に加担してしまっている事がある、ということだ。もう駄目だな、これ以上書いても。
　最後に一言だけ。差別はいけないと思う、あらゆる差別は無くなるべきだとも思う。だが、差別を全くしない人間がいるのだろうか、もし仮にいたとしても、僕はそういう人の一人になれるだろうか、自信がない。そして、差別の一つも無い社会が実現するのだろうか、それに対しても自信がない。仮に一つの差別が無くなったとしても、また全く別の差別が生み出されるんじゃないかと思ってしまう。
　そう言って開き直ることの卑劣さ、それは重々承知している。ただ、差別撤廃運動に命を掛けている訳ではない僕が「差別は絶対に許さない」と息巻いたら、それは安易極まりなく、紛れもない偽善である。僕は自分を偽善者にしたくない。かといって、黙り込んで何も言わない、見て見ぬふりをする、それも僕が望むあり方ではない。僕にはもう、どうしていいか分からない。

「１・１９三鷹事件の再審を求める集い（森達也氏講演）」　オパーリン

まず、三鷹事件について、しっかり説明しようとすると非常に長くなってしまうので概要だけ。
三鷹事件は戦後鉄道三大事件の１つとされ、１９４９年に発生した無人列車暴走事件。死者６名、負傷者２０名を出したこの事件の犯人として、竹内景助さんに死刑判決が下る。竹内さんは無罪を訴え再審請求をするが、受理されないまま１９６７年に無念の獄死。そして、竹内さんの死後４４年を経て遺族の方が２回目の再審請求を申し立てた。
非常に短くまとめたが以上が事件概要。
僕はこれまで三鷹事件の事はよく知らなかったのだが、１月１９日の会合では事件を解説した映像を見たり、再審弁護団の方々の新証拠に関する話、その時現場にいた方（後に新聞記者になる）の話、等を聞き、どんな事件だったのかについてはよく理解できた。
彼らの話を聞く限りでは、限りなく冤罪に近い事件なのではないかと思った。だが、実はこの「彼らの話を聞く限りでは」という所がポイントであり、僕は検察の言い分を聞いていない。だから実のところ、「どちらが正しいか」ということについてはなんとも言えない。元々、実現の難しいと言われている「再審請求」だが、上手く受理されて裁判で真実が明らかにされればいいと思う。
次は、森達也氏の講演について。まずは森氏の講演の内容を僕なりに要約してみた。
［森氏講演要約］
竹内さんの取り調べにおいては、自白を引き出すための検察側の相当過酷な取り調べがあったと思われる。また、先の（再審弁護団の方々の）話にもあったような不自然な証拠、など、証拠隠ぺいなどもあったのかもしれない。
この三鷹事件や下山事件、松川事件によって、戦後のリベラリズムは大きく後退し、その後の世相に与えた影響は非常に大きい（現在につながるパイプが太い）。
私は、これらの事件から現在に至るまでこの社会に引き継がれているものとして「集団」の心理があるのだと思う。人は一人では生きていけないので「集団」を作る。そして、大きな事件が起きた時、集団は恐怖を感じ、一方向に結束しようとする（社会の同調圧力は高まる）。そして、「異物（敵）」を探し、排除しようとする。そして、既存のメデイアはこの「民意」に加担し、「異物」を造り出し、民衆の危機意識をさらに煽る（仮想敵）。オウム事件以降（注、森氏はオウム事件に関する『Ａ』、『Ａ２』というドキュメンタリー映画を製作している）、この傾向にますます拍車がかかっている。
さて、マスコミは事件を起こした人たちを「異物」に仕立て上げようとするが、事件を起こした人は「凶悪な」人ではなく、実は私たちと同じ「普通の」人である。誰もがそうなる可能性を秘めているのである。しかし、私たちがそう思いたくないから、マスコミもその要請に応じて、犯人を「異物」だと表現する。
普通の人たちの集まりが危機意識を持たされ、異物を許せなくなったときに、集団の暴走、悲劇は起こるのである。私たちは、自分たち一人一人がそういった可能性を持つ生き物であるという事に常に自覚的であるべきである。

以上は、森氏がそっくりそのまま言った事ではない。あくまで、僕というフィルターを通しているので、そこの所はご了承頂きたい。
講演以降、僕は森氏の著書『Ａ３』、『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』を読んだが、森氏の訴えていることは一貫していると思う。
人が「集団」に所属して「個」である事をやめる時、それは非常に危険な事である。
最近よく思うんだが、何が正しくて何が間違っているのか、僕にはさっぱり分からない。それは正義か悪か、という点においてではなくて、真実か嘘かという点においてだ。本を読んでも、人に会ってみても、頭を抱えて考えても、分からん。でもやっぱり嘘よりは真実の方がいいしな、と思いながらまた読む。この事件にしたってそうだ。竹内さんが犯人なのかどうか僕には判断できない。再審請求が受理されて裁判所で判決が出れば、「ふーん、そうだったんだ」とその判決を信じるのかもしれない。でも、裁判所の判決が必ずしも真実と一致しない事は過去の冤罪事件からも明らかだ。だから結局、僕は何事に対しても確信を持って判断することはできない。
自分が正しいと思う事が、常に間違っている可能性を含んでいる。だから、判断の最後の所では「信じる」しかなくなる。

しかし、この「信じる」についても色々なやり方というか程度がある。すぐ信じる人となかなか信じない人。また、ある事柄について信じたいのか信じたくないのか。信じたいと思って正しさを補強する根拠を探すのか、信じたくないと思って、嘘を喝破する根拠を探すのか。その人がどうしたいかによって、方向性は違ってくる。

例えば、この三鷹事件については、僕はどちらかというと竹内さんが無実であればいいな、と思う。だから、無実を信じる為の根拠を探す。なんで無実を信じたいのかと言えば、検察や国家権力というものを疑っているから、という面もあると思う。それだけのことだ。中立公正、不偏不党なんてものからは程遠い、言わんや真実をば。

「アウトロー、文学の夜明け」　オパーリン

　新コーナー。ちょっとお堅めな記事を掲載していく予定。この雑誌というか、僕の性質上、毎号コンスタントに記事を掲載することにはならないだろうけどさ。備えあれば憂いなし、ということで。

・「アウトロー、文学の夜明け」

執筆者　オパーリン

・幻冬舎アウトロー文庫とは？

　書店に行くと幻冬舎文庫の右隣にひっそりと置いてある、主にサブカルチャー、アダルト、裏社会等のテーマに特化した文庫。幻冬舎ＨＰ、ウィキペディアで探したが幻冬舎アウトロー文庫（以下、アウトロー文庫）を単独で紹介したページは存在せず。
　類似した位置付けの出版ブランドとしては、河出文庫の派生系である河出ｉ文庫（以下、ｉ文庫）がある（ただ、ｉ文庫はアダルト系に特化しており、サブカルとはちょっと違うかな）。他にもアダルト系に特化した文庫等は存在するが、一般の文芸作品全般を扱っている文庫のサブカル系への派生としては、アウトロー文庫と河出i文庫の二つが目ぼしいものだと思う。
　後に理由を書くが、個人的には幻冬舎アウトロー文庫と河出文庫（ｉ文庫は殆ど無いので）の在庫の量を見れば、その書店の「質」が大体分かってしまうと思っている。

・私が所有するアウトロー文庫の本、目録

　アウトロー文庫を読んだ事のない人にどんな文庫なのかを説明するには出している本のタイトルを列挙するのが一番早いと思うので。
・安藤奈緒子
　『セックスに溺れた私　客に恋した風俗嬢・なお』
　→典型的な官能体験記もの。アウトロー文庫の得意技。
・赤神信
　『東スポ黄金伝説』
・家田荘子
　『ＡＶ男優』
　→『極道の妻』の作者。
・上原隆
　『友がみな我よりえらく見える日は』
　『喜びは悲しみの後に』
　『雨にぬれても』
・クーロン黒沢
　『裏アジア紀行』
　→中島らもに似ているかも。ヒッピー系っていうのかな。
・斎藤充功
　『脱獄王　白鳥由栄の証言』
・団鬼六　→アウトロー文庫の看板作家。
　『花と蛇』
　→代表作。杉本彩、小向美奈子等が主演で映画化されている。
　『鬼ゆり峠』

『新剣師　小池重明』
→漫画『ハチワンダイバー』の中で重明がモデルのキャラが登場（確か主人公の師匠）。
・塚田努
『だから山谷はやめられねぇ
「僕」が日雇労働者だった１８０日』
→幻冬舎アウトロー大賞受賞作。
・釣崎清隆
『世界残虐紀行　死体に目が眩んで』
・沼昭三
→アウトロー文庫の看板作家。確か三島由紀夫も評価していた。
『家畜人ヤプー』
→江川達也が漫画化。
・バクシーシ山下　→目下の所、僕の最大の研究対象。
『セックス障害者たち』
→高橋源一郎が解説を書いている。高橋は去年『恋する原発』を執筆。まだ読んでないがチャリティーＡＶの話らしい。
・麻枝光一
『マリファナ青春旅行（下）南北アフリカ編』
・山平重樹
『ヤクザに学ぶ決断力』
・吉永嘉明
『自殺されちゃった僕』
→『完全自殺マニュアル』的な流れの中の一人らしい。
ふぅ、以上。取り敢えずはアウトロー文庫のイメージは掴んでいただけただろうか。

・何故、今、アウトロー文庫が重要なのか？
～極地から全体へ～

ただの「好きなもの紹介、マニア自慢」で終わってはいけない。そう思い、普遍化を試みます。
アウトロー文庫で出版されている本達は、いわゆるカウンターカルチャー（サブカルチャー）と呼ばれるジャンルに属しています。ご存じとは思いますが、カウンターカルチャーとは正当な文化（中心）に対して傍流（周辺）に位置する文化の事です。つまりは、邪道、辺境、極地、隅っこに追いやられた場所から生まれてくる文化の事です。そして、新しいものはいつも辺境から生み出され、中心（メイン）に取って代わる、それを繰り返してきました。
今、出版業界は全体的に苦境に立たされている、とよくニュースなどでも耳にします。全体が不調になった時に真っ先に削られる、消えていくのは中心ではなく辺境の方だと思います。雑多な分だけ一つ一つが小さくて弱いですから。派遣切りとかと同じ原理ですね。
で、不況のせいでカウンターカルチャーが淘汰されてしまう（売れなくなる）とどうなるのか。多様性が無くなるわけです。ある集団内における多様性が失われると、その集団は環境の変化に対応できずに滅びてしまいます。持続可能な社会の実現には多様性の保持が不可欠なのです。同じ事が出版業界にも言えると思います。
雑多な辺境、カウンターカルチャーは文化の礎であり、時代（全体）を写す鏡であり、文化の最前線なのです。

・アウトロー文庫の戦略
～「アウトロー」のパッケージ化～

「アウトロー的なもの」というのは実際なところ、随分と大雑把な括りです。もともと雑多なものを十把一絡げにそ

ういう呼び名にしただけなので当然ではありますが。読む方（サブカル好き）もその趣味嗜好はそれぞれバラバラです。ですから、その一つ一つはとても小さく、弱い。
　そこで、その雑多なものたちがこの世知辛い世の中を生き残っていく為には、「パッケージ化」という戦略が重要になってくる。抱き合わせ商品とか、ブレーメンの音楽隊のイメージだと思います。一個一個では目立たずに埋もれていってしまう様なものでも、「アウトロー文庫」というパッケージの中に収まる事で、引き立て合うし、読み手に発見されやすくなるのです。
　サブカル好きの読者（読者候補）も、一個一個ピンポイントで探していたら手間がかかって仕方がない。そこで、アウトロー文庫の棚を眺めていると、「ああ、何となくこんなの本が欲しかったんだ」という本を見つけることができるのです。
　まとめると、パッケージ化の利点は
・読者と本を繋げるキュレーター的役割
・読者シーズ（隠れた需要）の掘り起こし
・シナジー（相乗効果）の発揮
が挙げられると思います。

・実例の紹介

　何となく抽象的な話ばかりになってしまったので、今までの話に説得力を持たせるためにも、カウンターカルチャー的な者がメインに影響を与えた（と僕が思う）最近の実例を紹介していこうと思います。
・西村賢太の芥川賞受賞
　説明は不要でしょうね。彼は本来ならば野垂れ死にまっしぐらコースでしたから。
・色川武大の再評価
　これは伊集院静の色川武大とギャンブルをして過ごした日々について書いた小説『いねむり先生』が売れたのが大きいでしょうね。漫画化もされているらしい。そのおかげか、色川武大の本が書店で手に入りやすくなった。
この二つの事例は、古典的なアウトローが再評価されているという最近の（メイン）文芸の流れを象徴していると思う。今回芥川賞を受賞した田中慎弥も（まだ読んでいないが）ニートだったそうだし。あとは、最近の話ではないが、桐野夏生がベストセラー作家の地位を維持し続けている事なんかも、今回の話の流れの中で語れると思う。
古典的なアウトローが再評価され始めているので、ここから新しきアウトローが発掘、評価される様な流れになっていけば、文学界の未来は明るいのではないかと思う。
・最後に

　底辺に沈殿し、一見すると淀んでいる様に思えるものたちは、実のところあらゆるところで繋がり、化学反応を起こしている（起こしつつある）。その変化の痕跡を辿り予兆をいち早く見抜く力が、これからの本づくりを担う人たちには必要とされているのではないだろうか。

「お前、悩んでんだろ？」第二回　弦楽器イルカ、オパーリン

連載（不定期）第二回

『お前、悩んでんだろ？』　企画趣旨

　悩み多き（と勝手に判断した）芸能人等のお悩みを、（頼まれてもいないのに）自称伝道師※が愛情を持ってときに厳しく解決するコーナー。

※伝道師（でんどうし）　１、キリスト教の聖公会・プロテスタントの教職の一つ。２、転じて、他人に何事かを熱心に勧める人。

今月の被害者

Ｍツコ・Ｄラックス

略歴（ウィキペディアより抜粋）

　Ｍツコ・Ｄラックス（男性、１９７２年１０月２６日？）は、日本のコラムニスト、エッセイスト、女装タレント。Ａ型、身長１７８ｃｍ、体重１４０ｋｇ、スリーサイズともに１４０ｃｍ。

　そのキャラクター性を生かしたテレビ番組の出演依頼は常にあったが、長い間『サンデージャポン』以外は断っていた。理由として「テレビ番組で共演した人が良い人だと知ってしまったら、客観的にテレビ番組の感想が言えなくなる」と説明している。タレントとしての自身を「分かりやすいキワモノ」と語り、その上で「おこがましい話だけど、こんな気持ち悪い生き物がテレビに映っているだけで、今の健全になりすぎてしまったテレビ業界に迷惑をかけることができて、それは良いことだなって思ったのよ。それで、テレビに出させていただこうかと思った」と出演する様になったと語っている。「いること自体が目障りな存在、不謹慎だと非難を浴びる存在になりたい。『テレビって不謹慎なものよ』ってことを体で表現したい」という気持ちがあったため、情報番組『ピンポン!』にコメンテーターとして出演し始めた時に視聴者から「なんで太った女装に、あんなことを言われなきゃいけないんだ」という批判が番組に寄せられた時には、狙った通りになったと述べている。だが、視聴者が自身のことを受け入れてくれたため、予想が外れてしまったとも語っている。

伝道師①：弦楽器イルカのススメ

　マツコも大変よね。だって、毒舌で斬り崩すべきテレビ業界がもはや斜陽でペラッペラなんだから。こき降ろすべき大御所も不在、視聴率もダダ下がりじゃ、毒吐く標的もありゃしない。

　この前の赤西とメイサだってそうよ。あの赤黒コンビ、はいデキちゃいました結婚しますって、大して認知度もないクセにもうちょっと頑張って隠しなさいよ。衝撃スクープにもそれなりのワビサビがあるっつうの。郷ひろみと松田聖子、宮沢りえと貴花田とか、大スターカップルにはもっと秘め事めいた下世話なチラリズムがあったわよ。草葉の陰からあの人が「恐縮です！」って飛び出したくても、そもそも暴く秘密がないんじゃ恐縮しがいがないわ。清純派アイドルのデビュー作がヘアヌード写真集じゃ、立つモノも立たないって話よ。いや、立ちはするよ。でもそんな明け透けにモロ出しされても八分立ちよ、世の男性諸氏は。隠された真相が暴かれる瞬間がエロなワケだからさ。

　まぁいいわそれは。あたし考えたの、割と真剣に。ナンシー関とか、古くはトニー谷とマツコを比較したの。簡単に紹介すると、トニー谷って戦後、嫌味な毒舌で人気者になった人だけど、それが視聴者の恨みを買って自分の子供誘拐されちゃうの。結局子供は無事だったんだけどその事件で号泣したり世間に叩かれたりして、以降は売れなくなっちゃった人。一方、ナンシー関はその批評精神を維持するためにメディア露出を極力避けてたし、本人もしがらみができると

酷評はできなくなるってどっかでたぶん言ってたはず。毒舌って難しいのよね。
　で、マツコも本気出せばナンシー関くらいの評論は書けるんじゃないかとあたしは思う。でもマツコはテレビに出演して自分が異物になることを選んだ。だからその代償として、好き勝手に毒吐けないしがらみにまとわりつかれてる。自著の帯でわざわざ「嫌いは好きの裏返し　ホントの嫌いはさようなら」なんてみつをっぽい前置きして、ネットで酷評されてる西野カナにさえイチイチ言い訳しながら批評してた。偏ってても「ダメはダメ」って断定するネットに、切れ味じゃ太刀打ちできない。でも、カナの歌を被災地の少女が歌ってるドキュメンタリー観たけど、歌と少女の境遇が確かに合致してたわ。ああ、こういうニーズがあるんだ、批評は難しいって改めて思った瞬間だったわね。
　とにかく、周りから毒吐けって言われてドクドク吐いても面白くないのよ。故・逸見さんとか一般的には真面目な人って印象だろうけど、笑顔で意外な毒吐いてブレイクしたとあたしは思ってる。掃除好きな太った人に、「やっぱり豚は綺麗好きって言いますからね！」くらいはニッコリ言える人だった。たけしでさえ「それ言い過ぎ」って止めてた姿を覚えてるわ。今なら安住アナとかが近いのかな。ああいう善良そうな立場なら、自分のタイミングでポロッと毒吐けるから意外性が受けるのよ。一度良い人になってみるのも手よね。
　で、今良い人になるのは簡単よ。とにかく２４時間走ればいいんだから。あと肩組んでサライ歌ったら良い人認定。その後は政治番組の司会でもして教養あるとこアピールしたら、もうやりたい放題。売れない芸人を気ままにプロデュースしようが、おバカタレントをクイズで笑い物にしようが、ゲストタレント喰いまくろうが好きにできるわよ。黒い交際に気をつけさえすればね。
　でもね、あたし思った。マツコ、あんたそんなことするために芸能界入ったの？ って。番組私物化して、若いジャニタレ喰いまくって森光子を「お義母さん」って呼んでる場合じゃないのよ。呼んでないけど。
　あんた、何のためにテレビ出てんのよ。もう一度テレビをお茶の間の中心に君臨させるためじゃないの？ あんたがやらなきゃ誰がやるの？ そのためにデッカい異物目指さなきゃ！
　そのためにはね、まず結婚しなさい。それもただの結婚じゃダメ。ＩＴ社長とか、青年実業家レベルじゃ谷亮子の披露宴の足元にも及ばないわよ。これからあんたにお似合いの、とびっきりな番組企画を紹介してあげるから。

① 「マツコ　ミーツ　ビッグダディ！　地獄のハッピーウェディング！」　マツコ遂に結婚、なんとお相手はあのビッグダディ！ 新妻マツコが吠える！「人様の恩を仇で返してんじゃねえよ！ もういっこのエンコも詰めて来い！」（注：いちいち説明しないので、わからなければネット検索等願います）

② 「ほこ×たて番外編　絶対に痩せない！ マツコ　VS　絶対に痩せさせる！ １０名のダイエット指導者」　「あたしは絶対痩せない！ プライド打ち砕かれて痩せるのはあんたたちよ！」

③ 「マツ黄門」　巨漢の女装黄門様、参上！ おなじみ必見の入浴シーン！「あたしの菊の御紋を目に入れなさいよ！」

④ 「紅黒白歌合戦」　紅組でも白組でもない、史上初の黒組が登場！ はるな「お好み焼き」愛、三ツ矢「グレーゾーン」雄二らを従え、黒組を束なるリーダーはやっぱり我らがマツコ「腹黒」デラックス！ 「大晦日を真っ黒に染めてやるわよ！」

　このラインナップ、どう？ 家政婦も見るわよ。４０％？ 目じゃないわよ。歴代最高の８０％狙えるわね。マツコ、あんたの冠、生かすも殺すもあんた次第よ。ニコ生の鬼塚ちひろに負けてたら承知しないわよ！ バイちゃお！
今週のアドバイス・まとめ

「あんたの夢は冠番組？
　ならあたしの夢は冠放送局よ！」

伝道者②：オパーリンのススメ

　はっきり言って、今の僕には人の悩みを解決している暇はないのである。しかも、今回の被害者はマツコである。悩みあるのか？儲かってるんだろうし、言いたいこと言ってるんだろうし、悩み無いんじゃない？と思う。しかし、そんな事ばかり言っているとこの企画が成立しなくなってしまうので、何とかやってみよう。
　まずはマツコの悩みとは何なのか、それを考えることから始める。そもそも、最近はテレビをあまり見ないのでマツコを見かける機会が少ないのだが、「マツコ＆有吉の怒り新党」という番組はテレビを付けてやっていると見る。まあ、たまに見る位の部類には入るだろう。あの番組への感想としては、夏目アナがめっちゃ可愛い。性欲を喚起させるフェロモン的なものがムンムン匂い立っている。それに比べてマツコは汚い。だが、マツコが綺麗になってしまったら彼の存在意義は無くなってしまうのだから、そういう意味では彼のメディア戦略といくか狙いはうまく機能しているのだろう。有吉は、すっかり牙が抜け落ちてご隠居さんみたいになってるね。
　ということで、僕がマツコを見かけるのはこの「怒り新党」くらいなものなので、ここでのマツコの言動から彼の悩みについて分析していく。番組の中でマツコが過去の自分について「世の中に対して毒々しい感情を抱いていた」的な発言をしていたことがあった。世の中に認められない自分と、認めない世の中への恨み、みたいなものがあったんだろう。それ自体は非常にオーソドックスな感情であるといえる。で、マツコの場合はテレビに出て、世間的に見れば成功した訳であるが、その成功によってかつて彼が抱いていた「世間への恨み辛み」として現出していたコンプレックスは解消されたのだろうか？
　僕は、ある意味では解消されたんだろうと思う。しかし、人間の心なんてそう単純なものじゃない。根深い所に植え付けられた彼のコンプレックス、トラウマ、ルサンチマン、そういったものは未だにマツコの心の中核に居座り続けているのではないかと思う。二つの相反する感情が共存し、葛藤している状態、それが今のマツコの心の中の現状なのではないだろうか。
　もう少し詳しく話そう。社会的な成功や世間に認知された事によって、売りだしたときの武器でもあったマツコの毒や牙の鋭敏さというものは鈍り始めている。お茶の間に求められるレベルでのぬるい毒を吐き、テレビ的な要求を上手に器用にこなす自分、こなしてしまっている自分。社会的要請に応答し順応してしまっているその自分に対して、かつての自分の残滓が激しく牙をむく。「おい、マツコ。今のお前は昔のお前が一番軽蔑していた「タレント」に成り下がってしまっていやしないか？なあ。もうやめちまおうぜ、こんな茶番。決められたラインの中だけで暴言を吐くポーズをするだけ。そんなの馬鹿らしいこと極まりねえじゃないか？」
　成功し安定を求めるマツコと、かつてのハングリー精神むき出しだった頃のマツコが葛藤している。それが今のマツコの心の中、つまりはお悩み何だろうと思う。で、その悩みをどうやって解決するか。はっきり言って二択なのである、今のままディレクターやお茶の間が「言って欲しい暴言」を吐き続けるか、かつての毒々しい自分、つまりは原点に立ち返るか。
　で、どっちにするのか。マツコ、その答えはもうすでに貴方の中で決まっているはずだ。分かってるよ、それでも怖くて、なかなか踏み出せないんだろ。ＯＫ。僕が背中を押してあげよう、世話の焼ける奴だなあ、まったく。ほら、自分を解き放っちまいな！
　ポン。
　僕はその巨漢の背中を押し、奈落の底へと突き落とした。巨漢の背中は闇に吸い込まれ、見る間に小さくなっていった。その小さな点が見えなくなって、完全な暗闇に戻ってしまった。その時、闇の底から「ありがとねぇー」という声が微かに聞こえてきた様な気がした。

今月のアドバイス・まとめ

「マジで言っちゃいけない事を言って、干されろ！」

連載小説『生き恥を、晒して足掻く、私かな』第二回　オパーリン

　連載小説　第二回
『生き恥を、晒して足掻く、私かな』
執筆者　オパーリン
・２「気持ちのいい話」

　やっとつまらない話が終わり、ここからは気持ちのいい話を書いていく。先ほど、僕の職業選択の基準の話のところで、僕は「書くことが好きだ」と書いた。正確に言えば「好き勝手に書くことが好きだ」と言うことも書いた。では、なぜ僕は「好き勝手に書くこと」が好きなのか、について書いていく。それが僕にとっての「気持ちのいい話」だ。
　今この文章を読んでいる貴方は「さっきから貴様は自分のことばっかり話していてつまらん。はっきり言ってお前の事なんてどうでもいいんだ。」と感じているかもしれない。至極尤もな意見だと思う。僕も、僕みたいに饒舌に自分のことばかり話している奴がいたら「うぜえな、こいつ。」と思う。
　しかしながら、少し考えていただきたい。人は誰か自分以外の人間と初めて話す時、果たして「自分の事」以外に話すことなんてあるのだろうか。
　まぁ、あると言えばある。お天気の事とか、景気の事とか、色々と、新聞やテレビ、ネットで話題にされている事柄とかね。それは「とっかかり」としてはありかもしれない。しかし、それらの話題なんて「誰とでも」話すことができる。つまり、そういった事柄について話している限り、僕と貴方は互いに「交換可能な他者」でしかない。
　やっぱり、「僕」と「貴方」がおしゃべりを開始するためには、僕は「僕のこと」を話し、貴方は「貴方のこと」を話すことから始めるより他ない。だから、引き続き「僕のこと」を話そう。「貴方のこと」は・・・僕の話が終わったら聞かせてくれ。

　僕が「書くこと」が好きになった理由について書いていく。そして、どんな風に書いてきたかについても書いていこう。
　僕が初めて文章を書いたのは二十歳の時だった。それまでは専ら読んでばかりいた。読むことが好きだったし、今でも好きだ。書くことと同等に好きだ。でも「読む」っていう仕事は「書く仕事」以上に少ないからね。働くと言うことを考えると、書くことを目指さざるをへない。
　世の中には「読むこと」が好きな人が沢山いて、僕がその人達と比べても沢山読んでいたか、と考えると、あまり自信はない。全然読んでいない方なのかもしれない。文学部でもないしな。世の中的に言えば「人より沢山読んでいるかどうか」が重要な事は分かっているが、それとはまた別に、僕個人としては「読むこと」が好きだった。下手の横好き、で一向に構わない。
　で、とにかくまぁ、二十歳の時に初めて文章を一本書き上げ、僕はそれを「小説」とのたまって、得意になって友人達に読ませて廻った。けれど、今から考えると、それは「小説」と呼べるような代物ではなかったのかもしれない。何しろ、自分の身の回りに起こった出来事をそのまま書き移しただけだったのだから。どちらかというと「日記」だな。ただ、当時の僕にしてみればそれが「日記」だろうが「小説」だろうが、そんなことはどうでもよくて、一から文章を終わりまで書き上げられたという事が嬉しくてたまらなかった。昔から「何か文章を書いてやりたいな」っていう気持ちは強かったんだけど、何にも書くことが思い浮かばなかったからか、どうしても書けなかったんだよね。だからその分だけ嬉しかったんだろうな。「ついに俺も作家や」って思って。
　その文章の内容は、まあ、あれだ。「恋」だったな。しかも、僕は女の子にモテるくちではなかったから「失恋」の話だった。凡庸きわまりない。こうして書いている今も、恥ずかしさで毛穴からウンコが染み出してきている。
　でも、まあ、仕方がない。幼い頃から僕は恥ずかし気もなく恥を掻く子供だったから、今更一つくらい恥を上塗りしたところで、大した問題ではない。それよりもできる限り正直に話すことを優先したいと思う。新聞の下りからも分かってもらえるだろうけれど、僕は「嘘」が嫌いだからね。それでも、嘘をつくことからは逃れられないとも感じているのだけれども。それはまぁ、おいおい書いていく。
　で、さっきも書いたけど、僕の書いたその処女作は事実をそのまま書いただけの代物だったものだから、それを他人

に読ませるにあたってはプライバシーの問題が発生してくる訳だ。だからさ、作中の登場人物のモデルになった人達に「他人に読ませてもいいかい」って許可を取ってまわった。フラれた女の子に許可を取る男。馬鹿まる出し。その子はいい子だったから、許可をくれたよ。と、書いているこの文章についても、またその子に許可を取らなきゃな。で、却下だったらこれはお蔵入りか。ぶっちゃけめんどくせぇな。これから先文章を書いていくにあたっても、いちいち他人の顔色を伺いながら書かなきゃいけないとしたら、それはひどく不自由な事だしな。内容の面でも、どうしても当たり障りの無いことしかかけなくなってしまう。色々と文章を書いていて、未だに難しいのはそこら辺のところだな。

なにはともあれ、僕はその処女作に「働きアリは何を思う」という題名をつけて、学生主催の文芸賞に応募した。元々、この賞に応募しようと思ったのが、書き始めたきっかけだった。その頃の僕は「賞」が欲しかったわけだ。書くことで誰かから誉めて貰いたかった。他者への働きかけの手段として書いていた。つまり、「誰かの為に」書いていた。

しかし、その当時から「誰かのために書く」と言うことには、なんか「スケベ心」があるような気がして、後ろめたさの様なものを感じていた。でもその問題についてはうやむやにしたまま、メールに文章を添付して、送信ボタンをポッチと押してしまった。

せっかくだから、ここで少し脱線して「何のために書くのか」と言うことについて考えてみる。大ざっぱに分けると三つあると思う。①「誰かのためだけに書く」②「誰かのためにも自分のためにも書く」③「自分のためだけに書く」の三つ。

書く文章によって①から③のどこを目指すのか、違ってくる。ジャーナリズムの文章は①を志向するものであるべきだろう。そのことに依存はない。

では、小説の場合はどうなのか。その小説の質によっても違ってくるであろう。その「質」というのはどんなものかというと、おそらくはその小説が「読者から金をとるか」どうかにかかっていると思う。やはり読者から金をとる小説の場合、読者が①から③のどの文章を嗜好しているのか、と言うことを少なくとも考慮に入れることくらいはせざるをえないのではないか。

まあ、今のところ、僕の書いた小説は金を取っていないので、つまるところ僕自身が①から③のどの小説を書きたいのか、にかかっている。で、僕はやっぱり③、「自分の為だけに書く」小説にこそ価値があるのではないか、と思う。僕は小説の読者としても③の小説が好きだ。「俺は作家にサービスされるために読んでるんじゃないんだよ」と思うのである。

どうもこの文章は脱線が多い様な気がするが、話をもどそう。文芸賞に応募した処女作の話に。

自分の書いた文章を読み返してみても、僕はそれに客観的な判断を下す能力がない。その文章が良いのかどうか分からない。どうしても「色眼鏡」で読んでしまうので、個人的には「うむ、良いじゃあないか」と思ってしまうし、客観的に読もうとすると「でも、僕が書いたものなんてなぁ、他人が読んだって面白くないんだろうなあ」と自虐的な気持ちが作用してしまう。

だから、僕の処女作がその文芸賞の選考を通過するかどうか、その結果を待つ間、僕は何とも複雑な気分であった。「受かるに決まっている」と「あんなもん、落ちるだろうな」という両極端の気分の間を行ったり来たりしていた。

結果として「働きアリは何を思う」は一次選考を通過し、最終選考で落ちた。その賞には二十作ほどの作品が応募しており、そのうち三作品が何らかの賞をいただくことになっていた。だから僕の小説は二十作中五番目かそこいら、と評価されたわけであった。

一次選考通過の通知を貰ったときは「ざまあ見やがれ」と歓喜し、最終選考の落選を知ったときは「ちっ、愚民めが」と怒った。落ちた後、「こんな賞は、俺様の作品の価値を見抜けないなんて、何ともセンスのないゴミだ」と思い、「全然平気、ショックなんて受けないさ、僕の小説の価値はもっと別のところにあるんだもの」と思おうと必死に努めたが、やはりショックはショックであった。女にフラれていい気分のする奴がいないのと同じことである。

女にフラれて勃起不全に陥る男もいる、繊細な男なんだろう。幸いなことに、僕は賞に落ちてもそのような「勃起不全的」な症状に陥ることはなかった。「ああもう嫌だ、何も書きたくない」とはならなかったのである。多少ふてくされはしたものの、「何糞、見返したるわ」と悔しがって、次の小説を書こうと思うようになった。

つづく

オパーリン一ヶ月（日記より）

　オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。今月号から巻末に降格（笑）。

２０１２年１月
・２１日
　東町健太氏と東中野で「若手僧侶による新春説法ナイト」に参加。途中に寄ったアラーキー名曲喫茶も良かった。
・２５日
　アサヒホールディングスグループ（環境リサイクル系企業）の説明会兼一次選考に参加。その後、マス読ライブ出版編に参加。打ち上げでは隣の席にいた学生二人（仮称Ａ君、Ｂ君）と仲良くなる。彼らと歌舞伎町のカラオケでオール。金欠のため、Ａ君にカラオケの料金を借りた。見ず知らず、あってその日の僕みたいな人に金を貸してくれるＡ君の心意気に感激。
・２６日
　池袋にて、Ａ君に借りた金を返す。
・２７日
　双日セミナーに参加。経営体感ゲーム的なものをした。大人げのかけらも無く、思わず夢中になる。結果、僕らのチームは可も無く不可も無くの順位であった。ガチムチ体育会系な雰囲気が漂っていたので、僕には合わないかな、と思い、以降の選考には参加しなかった。
・２８日
　ブックオフ説明会に参加。社員の方々から「本が好き」とかそういった類の発言を聞く事が一切無かったのが印象的だった。
２０１２年２月
・６日
　三笠書房ＥＳ締切、提出した。ブックオフＥＳ締切、提出せず。出版志望者勉強会に参加。企業研究発表では「幻冬舎アウトロー文庫」について発表。ちなみに同社は新卒採用を行っていない。
・７日
小学館ＥＳ締切、提出した。「ドラえもん、ＥＳ通る道具を出してよー（泣）」とは書かなかった。
・９日
　マス読出版文科会に参加。月刊『創』編集長のお話がメイン。途中、「岩波の採用をどう思うか」というアンケートがあり、僕は迷わず「良くない」の方に挙手。が、「良くない」に挙手したのは僕だけであった。何だかなあ。
　分科会終了後、全体での打ち上げは無かったので、前回の打ち上げで仲良くなったM君（仮称）と新宿で飲む。滔々と自説をまくし立て、M君がそれを聞く（聞かされる）という構図に。終電で帰る。可哀想なM君、お疲れ様。
・１０日
　渋谷ユーロスペースにて死刑映画週間という企画があり、『ＢＯＸ　袴田事件　命とは』を見る。上映後には森達也氏のトークイベントがあった。僕はちゃっかり挙手して森氏に質問。丁寧に答えてもらった。感激。
・１４日
　集英社ＥＳ締切、提出した。アサヒホールでイングス人事面接（グループ面接）。学生３人人事２人での面接。残りの二人の学生を圧倒し、完璧に自己をアピールしつくした。通過を確信した。後日、祈られる。
・１５日
　芝浦と場見学。
・１６日
　講談社ＥＳ締切、間に合わず。睡魔に負けた。さよなら、講談社。

読了リスト、感想文

　このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いていきます。

－本－

・里中李生
『「快楽主義」のすすめ』
　その会社の出している本を一冊も読んだことのない出版社の履歴書を書くために、ブックオフで１００円で買った本。予想外に面白かった。作者が「酒を飲んで、女にフェラチオされながら書いている」というだけのことはあって、内容の破綻とか、そういうレベルではなく、文章が破綻している。一行だけの段落が数ページ続いたりとかさ、もう段落の意味無いじゃん、それって、みたいな。「これなら俺でも本書けるかもしれん」と希望を与えてくれる一冊。

・森達也
『世界が完全に思考停止する前に』
　タイトルからしてもうね、至高だよね。２００３年から２００４年に書かれた評論集。森氏の主張と同じような事を言う人がそもそもあんまいないんだろけど、もしいたとして、それでもこんな風には書けないんだろうな。彼の文体というか言葉の選びとり方が、（彼らしいとしか形容のしようがないのだが）とても好きなんだな。

『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』
　全ての表現、言論は作り手が現実を切り取り、自分というフィルターを通して再構成したものである。だから、公正中立、不偏不党であることなんてどだい不可能だし、所詮は主観でしかない。標題の「嘘」という表現に込められているのはそういう主張だろう。
　それは恐らく、一度でも何かしらの表現に従事した人間なら、誰しもが薄々感づきながらも、なかなか言語化できなかった事であり、できれば目を背けていたかった事なんじゃないかと思う。誰でも「俺の言っていることは正しい」そう思いながら書いていたいもの。
　でも、書く側も読む側も「所詮は主観、言ってしまえば嘘に過ぎない」そう自覚しながら読んだり書いたりするべきなんだよね、本当は。
　という、とても身につまされる一冊。
　また、作者が注目するドキュメンタリー作品について言及しているのも見どころ。

『Ａ３』
　浅原彰晃の裁判を取り巻く異常な現状に迫ったドキュメント。この本は「講談社ノンフィクション賞」を受賞したんだけど、抗議が殺到したらしい。どんな人達が抗議するんだろうな。
　まあ、実際に読むのはかなりしんどかった。オウム＝絶対悪＝死刑という風に考える方が楽で、その図式から少しでも外れる意見は聞きたくない、そう思う人が多いのだろう。森氏はその思考停止の危うさを指摘する。できれば見たくない、目を背けたい問題だから、指摘された人は怒る。
　オウムとか、そんなの普通の人である僕、私には関係ない。そう思っているあなた、まあ読んでみなって、全てはそこからだ。

『職業欄はエスパー』
　超能力。あなたは信じますか？
　存在しないことの証明というのは非常に難しい。だからこそ、自分の理解の範疇から逸脱したものを面前に差し出された時、人は恐怖し、苛立ち、それを異物として排斥しようとするのだろう。

超能力者の悲哀というテーマは、言ってしまえば良くある、使い古されたテーマだろう。僕の知っているだけでも、筒井康隆の『家族八景』からなる七瀬シリーズ、映画なら『ＸＭＥＮ』とかね。でも、このテーマをおふざけでもオカルトでもなく、ドキュメントとして文章化、映像化するというのはすごい。同題のテレビ放送された映像がユーチューブに残っているので、気になった人は見てみることをお勧めする。

これを読んで友人に

「お前、超能力って信じてる」

と聞いたところ、

「昔、ユリゲラーが視聴者の家の壊れた家電を、超能力でブラウン管越しに直します、って言うのがテレビでやってて、実際にテレビの前に掃除機置いて試してみたんだよ。」

と話しだした。僕は意外な展開に驚きながらも食いつく。

「で、直ったの？」

「直ったんだよ」と友人。

「だから俺は超能力を信じる」

だって。

僕はどうなんだろうな。あった方が面白いなあ、くらいには思うけどさ。まずは実際に目の前で見てみたいな。

・宮崎学

『「自己啓発病」社会』

本誌１月号に僕が執筆した「自己啓発嫌いの弁」にある通り、僕は自己啓発本に懐疑的な姿勢を持っている。で、その記事を書いた後に書店でこの本を発見し、「同じことを考える人もいるもんだなあ」と思って即買い。

今まで何となく考えていたことを言語化して整理してくれた感じがするし、自己啓発の歴史とか、新しい視点も得られて役に立った。

作者の宮崎学自体は親父がヤクザで、本人は元共産系ゲバルト部隊隊長という非常に面白い経歴の持ち主なので、他の著作も読んでみようと思う。

・田中小実昌

『新編　かぶりつき人生』

東町健太氏と呑んだ時にもらった本。エロエッセイって言うのかな。ストリップの歴史とか、裏街道、脇道の戦後史というのが書かれていて面白かった。

多少畑は違えど（エロとギャンブルの違い）色川武大と被るところがあるなあと思って出生年を比べてみたら、色川が１９２９年生で田中が１９２５年生で、色川の５歳年上なんだね。戦後焼け跡派っていうのかな。

いつの時代にも、傍流の声無き者の声を掬い上げる人達がいて、その人達の書いた文章が２０１２年の現在に至るまで（かろうじて）残り、僕を含めた若者が読むことができる。そのことが嬉しいな。

－映画－

・高橋伴明

『ＢＯＸ　袴田事件　命とは』

袴田事件という事件を「冤罪なんじゃないか」という視点で撮った映画。現実に現在もなお「無実の死刑囚・袴田巌さんを救う会」という団体が再審請求活動をしている。

で、この映画は、袴田さんが無実なのではと思い、検察や警察の取り調べに疑問を感じながらも死刑判決を下してしまった熊本典道元裁判官と、袴田さんの二人が主人公。

この映画を見る限りでは、「検察、警察の取り調べ酷すぎじゃん」と思ってしまう。つまり、検察、警察が絶対悪として描かれている。だから、見る側、部外者としてこの事件をできる限りバイアスを排除して判断する為には、検察、警察側の意見を聞きたいところなんだが、そういう映画や本は（おそらく）無いだろう（知っている人がいたら教えてください）。だからこそ、白黒付ける為にも、再審して欲しいなあと思います。

－雑誌記事－
・小野一光
「ルポ　被災地のデリヘル嬢たち」
　新潮４５　２０１２年３月号
　おお、こういうのが読みたかったんだよ！という感じ。８４０円出した甲斐があったわ。
　やっぱりどんな時でも人間とセックスとは切り離せないんだよ。で、風俗なんて所詮は束の間の幻想なのかもしれないけど、人間は幻想がなくちゃ生きていけない生き物なんだよ。被災者も、部屋でオナニーしている僕も、同じとは言わないけれど、フィクションが必要なんだと思う。このルポを読んで改めてそう思った。
　で、半ば確信めいてはいたものの想像の範疇でしかなかったものが、現地のケーススタディというか具体的な証拠が示されて安心した。
　細々とでも、こういった仕事続いていって欲しいと願う。

－ＡＶ－
・『怪奇ミステリーファイル　潜入!!ＳＥＸ教団』
　ＡＶのカテゴリーで紹介するかどうか迷ったんだけど、他に入れる場所もないしな。「リトルペブル同宿会」という（恐らくは）キリスト教系の新興宗教に密着取材したドキュメンタリー。リ・コウジという俳優・フリーライターという人が持ち込んだ企画らしい。リは以前からこの教団に密着取材していて、今回是非とも映像に残したいということでこの企画を「怪奇ミステリーファイル」に持ち込んだのだそうだ。
　で、このリさんの取材というかアポ取りが意外としっかりしていたので、実はタイトルから想像される様な隠し撮り的な「潜入」ではなくて、ちゃんと許可をとって取材している。しかも、胡散臭いものをイジりたい、みたいなおふざけテイストでもなく、しっかりと教祖とか信者にインタビューしていて、純粋にドキュメンタリーとして面白かった。
　僕個人としては、このリトルペブル同宿会については、２、３年前にミクシイで信者のアカウントを見つけたことがあって、その時に気になって一回ネットで情報を確認するくらいのことはしていた。なので、今回ツタヤで「リトルペブル」の文字が書かれたパッケージを見た瞬間、「やっと来たか！」と発狂して即借りした。
　観ての感想について書く。いわゆるカルト教団っていうと、世間的にはすごい「害悪」っていうイメージがあると思うんだけど、この教団についてはちょっとそういう「洗脳」とか「反社会的」という所からは外れるんじゃないかな、と思った。
　恐らくだけど、彼らはまず第一に金は全然無いんだと思う。健康食品作ったり、本出したり、衣装作ったりしてんだけど、まったく売れていないらしい。で、教団本部は秋田県の山奥にあるんだけど、その建物がマジでボロい、ていうかただの民家。極めつけは信徒数。１０人だって。
　あと、洗脳についても、信者が騙されて被害にあっているというよりも、この社会で上手く生きれずに傷ついた人たちが山奥でひっそりと寄り添い、傷を舐め合っているという感じ。信徒も教祖も相互依存してる様な、コミューン的な感じに見えた。そして、それはそれで一つの生き方としてはありなんじゃないかな、とすら思ったね。
　肝心のセックス儀式については、昔は信者とスマタをしてビデオに撮ってたんだけど、今は「神ちゃま」（彼らは神のことをそう呼んでいる）のお告げでもうやらなくなっちゃったんだって。

・『挑発　小向美奈子』
　本誌１月号で小向美奈子のＡＶデビュー作についてレビューしたが、今回はそれに引き続き第二作を見たので感想を書く。あれだけ文句言っといて、なんだかんだで結局また見てんじゃん、と我ながら思うのだが、これには訳がある。いい訳だが聞いてくれ。
　いやね、就活の合間に空き時間ができたからビデオボックスに入ったんだよ。そしたら、棚の一番いい所にデデーンと置かれているもんだからさ、別に興味はないが一応見とくか、と思ったわけさ。
　で、感想。一作目と比べれば結構頑張ってる感じはあったな。三作目（ちなみに三作目でお終いらしい）は中出しまでしてるみたいだしね。
　あ、ちょっとわき道にそれて中出しについて書くと、個人的にはＡＶを選ぶ時に中出しがあるかどうかって結構重要

なポイントなんだよな。なんでだろう、別に自分がセクロスしている訳じゃないんだから、ゴムがあろうと生だろうと何も変わらないはずなのにな。本気度の指標というか、病気とかのリスクを背負ってる覚悟を感じるところはある。中出ししてる方が本能に忠実みたいな所でのリアル感もあるのかな。女性を犯してるぜ、みたいな感じがするんだろし。

ＡＶ有害論の中には、ガキが中出しものばっかり見てたら、実際の彼女にもそれを要求するみたいな弊害が出かねないという主張もありそうだな。「確かに」と思わなくもないしな。実際、ヤンママとかでき婚とかって、そういうＡＶの影響も無くはないんだろうしな。

まあ、「だからＡＶは害悪」っていう短絡にはどうかなと思うけど。そもそもちゃんと性教育しないのが悪いんじゃんと。ＡＶをフィクションとして楽しむための素養を身につける為にも、性に関する基礎教育はしっかりとしなくちゃだめだな。

あとは、そもそも論として、生殖の観点からすれば、ゴムつけてするセクロスは全部「遊び」「余剰」だからなあ。いくら医学が発達しても、妊娠、出産は危険を背負っているものだし、だからこそ中出し＝本気もしくは愛、的な感じになるんだろうな。

と、本筋からそれにそれた。小向美奈子に話を戻そう。頑張ってることは認めるんだが、その頑張りが裏目に出ている気がするんだよな。どうしても演技臭くなるというか。興醒めするんだよね。ほら、「アタシエロいです」って張り切っている女とかって実はあんまりムラムラこないところがあるじゃん。オープンエロはあまりエロくない理論だよね。

小向も男優のピストンに合わせて一生懸命に大きな喘ぎ声を上げているんだけど、そのピストンと喘ぎ声との間に、自然のそれと比べてコンマ何秒かのラグが生じているんだな。で、それに気づいて白々しい気持ちになっちゃう。

まあ、抜いたけどさ。

執筆者略歴

　本誌執筆陣のプロフィール。

・オパーリン
　１９８８年生（２３歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国構想」を計画し、勝手に「オパーリン王国」を創り独立。本誌『月刊オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。
　また、アマチュア小説家としても活動しており、過去３度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太
　たぶん１９８７年生まれ（２４歳）。僕（以降、オパ）が４月生まれであるのに対して、彼は３月生まれなので学年は２つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。
　大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。
　オパとはかれこれ３、４年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。
　現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

・多良鼓
多良鼓
　１９８８年生まれ。熊本出身。ＰＮは大学入学時に付けられたあだ名から。大学では長ラン着てギャーギャー騒いだりサイリウム持ってハイハイフッフーしてました。可もなく不可もない平凡な人間ですが、出会う人に関しては運が良い方だと思っています。ここでも縁在って、文章を書くという珍しい機会を授かりました。文章力の鍛錬を目的に、毎月一稿書かせて頂いています。鍛錬に付き合わされている形で申し訳無く思いますが、もしお気に召めしましたのであれば、来月も是非お付き合いして下さりますれば恐悦至極でございます。

・弦楽器イルカ
　よく知らない人。気づいたら記事が掲載されていた。とりあえず隅っこに寄せて、少し泳がせてみることにする。

・鶴首
　１９８８年、群馬県生まれ。小さい頃は悪戯少年であったが、中学生時代に音楽の美しさを実感して以来、「音楽は恋人」といった独特のエロスを持ち、自分で音楽を創造しないながらもしばらく音楽以外の友人の少ない学生生活を送る。女性から逃げるように男子校に進学し、高校時代は宇宙物理学や環境倫理学に思いを馳せ、あらゆるものの数式化を試みるが、やがて限界を感じ、不確定な生命科学への道を選ぶようになる。しかし、大学でまたしても学問の限界を痛感し、その反動で、売れない「破滅的な音楽」、「不安定な音楽」にも興味を持って深く追求するようになり、やがて音楽からの影響で諸行無常な世に美を見出すようになる。そんな中、月刊オパーリン王国の存在を知り、「王国構想」に感銘を受けたため執筆に至った。

編集後記

　文藝春秋社のＥＳをやっとこさ書き終え、郵便局に行って速達で出し、ラーメンを食らい、書店で週刊誌をまとめ買いし（就活の為とはいえ毎週４誌も買うととんでもない出費になる）、家に帰ってきて、この編集後記を書き始めた。書き始めてふと思ったんだが、本誌は「序文」に始まり、「編集後記」で終わる構成になっているが、どっちか片方でいいのではないか。どちらもメインの記事の編集が終わってから書くので、殆どタイムラグがない。つまり、気を抜くと内容が重複しかねないのである。
　仮に「序文」は記事の紹介、「編集後記」は記事の振り返り、と役割分担したとして、紹介と振り返りとの間にどれ程の差があるのであろうか。じゃあ、どっちかやめろよ、という話になるのだが、やはり始まりと締めは自分で書きたいという気持ちもあるんだよね。ま、領分の取り合いにならないように「なあなあ」とやっていくしかない。
　近況を書こうか。「第十四回文学フリマ」に申し込んだ。文学フリマって何ぞや、っていう人もいるだろうから説明すると、文学系同人誌の即売会である。今月末に参加可否の抽選結果が通知されるはずなので、受かっていれば参加できる。
　即売会とはつまり、作品を売ることであるから、参加するとなれば当然僕も自分の作品を売ることになる。もし一部でも売れれば、初めて自分の書いたもので人様からお金を頂戴することになる訳である。いやー、楽しみだ。受かってるといいな。
　記事の振り返りとしては、何と言っても「ルポ」だな。書くのが難しかったし、自分の中でさえ及第点を与えるに遠く及ばない出来栄えだった。書く対象がこの世の中に実在しているっていうのが難しいよね。どうしても気兼ねというか、書きたいように書けなくなっちゃう。まあ、覚悟の問題でしかないのだろうから、今後は腹をすえてビビらずにやっていくしかない。
　と、これくらいにしておこう。今月号もなかなか分厚い冊子になったが、それは一重に執筆陣の方々の協力によるものである。どうもありがとうございました、今後ともよろしくお願いいたしますね。
　来月号で月オパもいよいよ創刊半年である。いやー、がんばろう。じゃ、締めるか。最後まで読んで下さった皆さん、ありがとう。また来月、紙面でお会いしましょう。それまでお元気で。
　２０１２年２月２３日

　「月刊　オパーリン王国」では「はばからない」をコンセプトに、「何か、何でもいいから、とにかく主張したいだ」という方に対して紙面を提供したいと考えています。少しでも思い当たる節のある方は是非、記事を投稿してください。
送り先は、
Kuukiyomimasenn0409@gmail.com
まで。
本文、形式、筆名、簡単、筆者略歴を添えて送りください。お待ちしております。（国王　オパーリン）
「月オパ」のバックナンバーは電子書籍サイト「パブー」で読むことができます。
http://p.booklog.jp/users/opaarinn
―２０１１年２月２４日発行―
編集・発行人　オパーリン

パブー版あとがき

　時の洗礼を受け、文章は色褪せ、忘れ去られる。それはこの雑誌、そして今僕が書いているこのあとがきとて例外ではない。僕が今書いているこのあとがきを書き終えれば、僕や幾人かの人達が書いたこの文章の連なりは「月刊　オパーリン王国」としてインターネットという情報の海の中に放たれ、時を刻み始める。そして、今僕が半月前に書いた文章を読み返して時間の経過や過去といったものを感じるのと同じように、この月オパパブー版も埋もれていってしまうのだろう。致し方ないことではあるが、心血注ぎ、友と作り出したわが子同様のこの冊子を、発行する直前のこの気分。息子を戦地に送り出す前夜の親の子を思う気持ち、などに例えたら不謹慎極まりないのかもしれないが、でもそんな気持ちなのではないのかと思うのだ。

　わが子よ、俺はこれからお前を解き放つ。存分に戦ってくれ、お国のためなんぞではなく、唯唯己だけのために。

　２０１２年３月１４日

　オパーリン

月刊　オパーリン王国　２０１２年　２月号

http://p.booklog.jp/book/46529

著者 : オパーリン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/46529

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/46529

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.